

紀の川市商店街活性化基本計画 平成 20 年 1 月

「門前町りばいばる」

伝統ある歴史と、現在の生活という2つの顔をもつ、粉河とんまか通り商店街。
錆びれていく商店街の活気に歯止めをかけようと、すぐ近くにあるスーパー観光資源「粉河寺」との共存に、多くの人たちが、知恵を絞る。特効薬はない。
築き上げたこのまちの文化は、室町時代から脈々と受け継がれてきたもの。
時間をかけて、ゆっくりと、自分たちのこのまちを「ふたたび愛しよう」と立ち上がる。

和歌山県紀の川市



粉河とんまか通りのアート平板とモニュメントの設置予定場所

- …… 既存の街路灯
- …… 既存の街路灯にモニュメント・周辺歩道にアート平板を設置



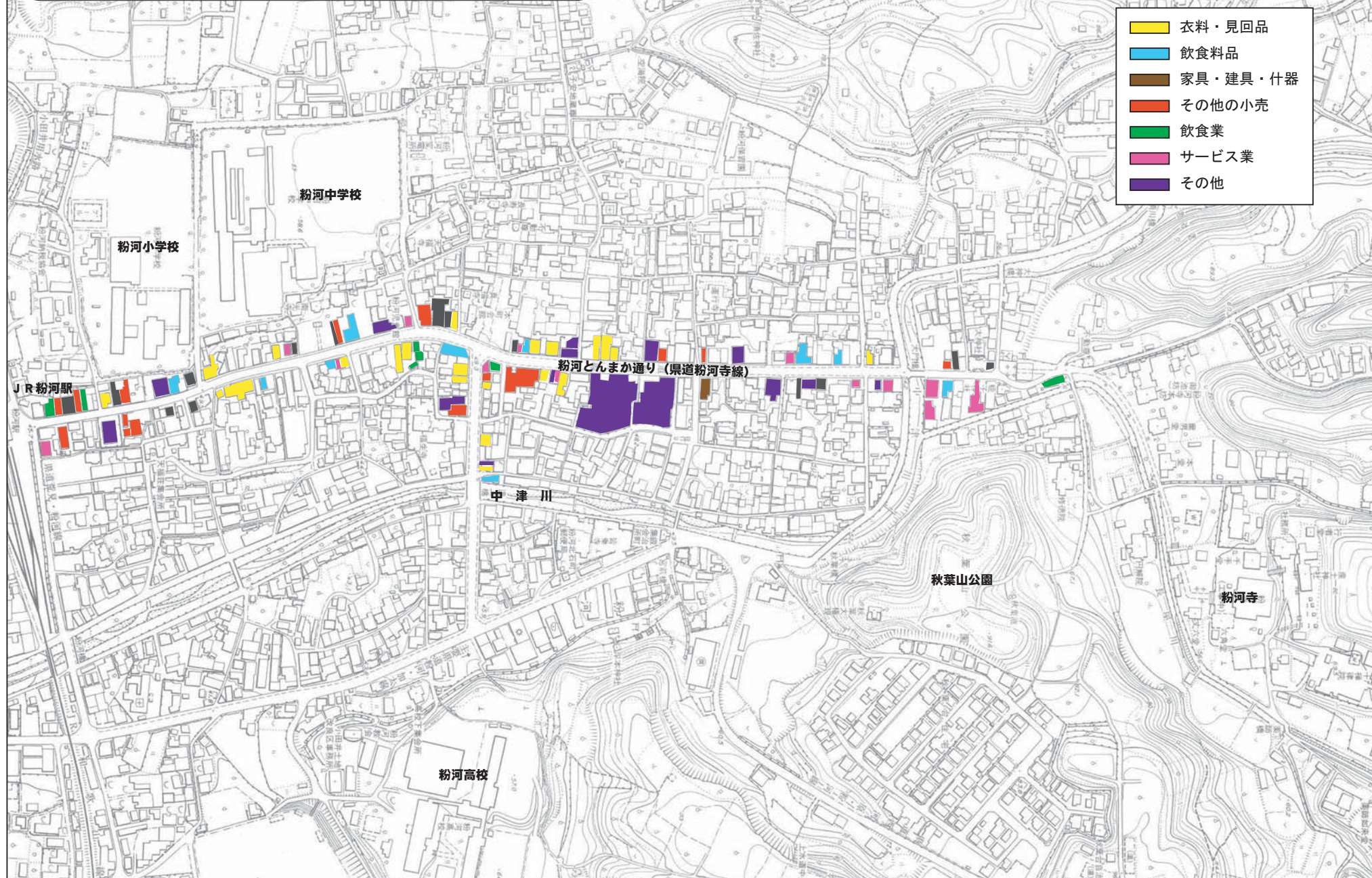
紀の川市の中心市街地の商店街振興エリア (黄色の線内)



粉河とんまか通り周辺

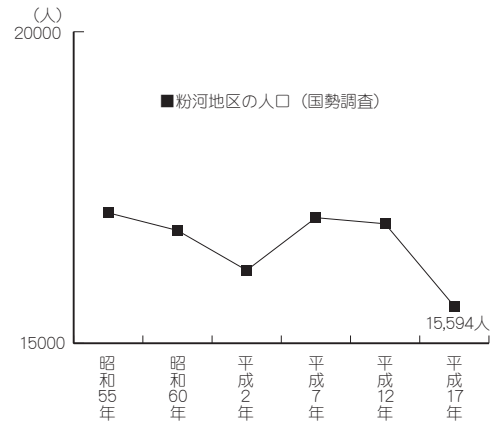


粉河とんまか通り商店街業種構成図



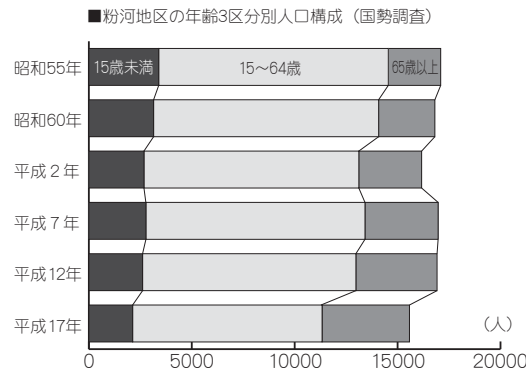
■粉河地区の人口推移

昭和55年の国勢調査時をピークに、その後、旧粉河町の人口は減少している。



■粉河地区の年齢3区分別人口構成推移

昭和55年の国勢調査時では、15歳未満は19.8%、15～64歳は65.3%、65歳以上は14.9%であったのが、平成17年の調査時では、15歳未満は13.6%、15～64歳は59.1%、65歳以上は27.3%となっており、高齢化がすすんでいる。



■粉河地区の商業の動向

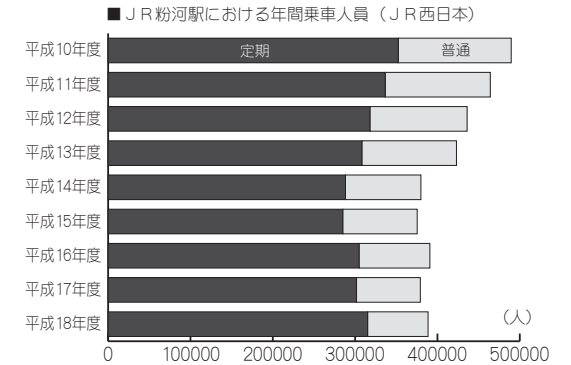
年間商品販売額は、ほぼ横ばいであるが、従業者数と商店数は、毎年減少している。

■粉河地区の商業の動向（商業統計調査）

	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16	H 17	H 18	H 19
年間商品販売額（百万円）	11,686	11,636	11,548	11,554	10,429	12,519	12,369	11,920	11,913
従業者数（人）						919	919	813	813
商店数（店）	212	211	210	210	205	191	189	176	176

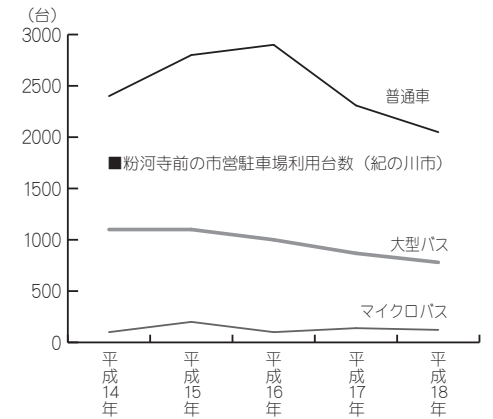
■J R粉河駅における年間乗車人員の推移

平成18年度は、平成10年度に比較して、約20%減少している。
また、定期客数はここ数年はほぼ横ばいであるが、普通客は、年々減少している。



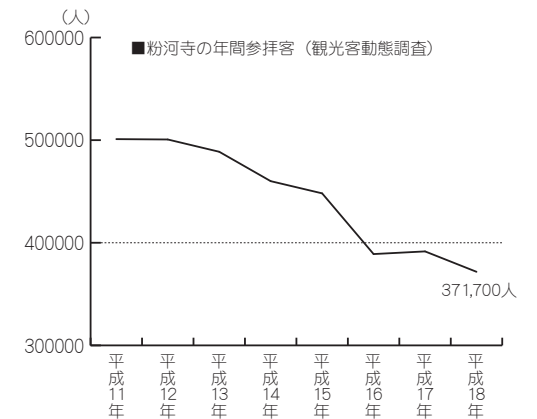
■粉河寺前の市営駐車場利用台数の推移

粉河寺へ参拝する普通車や、大型バスは、減少傾向にある。



■粉河寺の年間参拝客の推移

平成4年をピークに、その後、平成11年からは、毎年減少している。平成16年には初めて40万人を切り、平成18年は約37万人となっている。



第5章 粉河とんまか通り商店街の現状と課題

■粉河とんまか通りの概要

粉河という町は、西暦770年に粉河寺の創建により、粉河寺の参拝客で賑わう門前町として栄えてきました。すでにこの頃から紀北筋一帯の物資の集散地となり、江戸時代に入ると、粉河酢をはじめ粉河コンニャク、粉河うちわ、鍔物などの有名な品々があったようです。また、明治の鉄道開通により粉河駅と粉河寺をつなぐ参道が、現在の商店街のはじまりとなっています。

現在のとんまか通り商店街は、JR和歌山線粉河駅周辺から粉河寺に至る通り（県道粉河寺線・市道粉河中津川線）に面した南北約900mの街区と、このほぼ中央から中津川の這上橋に至る通り（市道長田石町線）に面した東西約120mの街区で形成しており、旧粉河町の中心市街をなしています。

「粉河とんまか通り」という名称は、平成17年9月3日に粉河町商工会が公募を行い決定した名称で、それまでは通称「本通り商店街」という名称で親しまれてきました。

■粉河とんまか通り商店街の現状と課題

近年経営者の高齢化や後継者不足により、商店数が減少し、空き店舗及び、住宅化により商店街機能の低下が見受けられます。

商店街の機能低下により、取扱商品の品揃えも、十分ではなく、一ヶ所で身の回り品から食料品等の購入を済ませられず、また、自動車の普及に伴い、日常の買い物にも自動車を利用する現在のスタイルにも、大型店のように広い駐車場が備えられていないため、町外の大店への買い物客の流出が加速していることが、商店街の活気低下の原因であると考えられます。

また、粉河とんまか通りが粉河寺の門前町として栄えてきた経緯があるにもかかわらず、粉河寺を含めた門前町がひとつの観光資源であるという認識が薄れたことも商店街機能低下の一因であると考えられます。

そのようなことから、粉河とんまか通り商店街の問題点を整理すると次のようにまとめることができます。

- ① 商店街の機能低下
- ② 粉河寺との連携不足
- ③ 高齢化及び後継者問題
- ④ 駐車場整備の遅れ

これら4つの問題点に対して、それを克服するための事業施策はつぎの通りです。

①商店街の機能低下

粉河とんまか通りの商店が、居宅を兼ねているところが大部分であることから、廃業に伴い店舗部分を居宅にするという傾向が多く見られ、それが、商店街の空洞化の大きな要因であることから、廃業後の店舗並びに、空き店舗となっている部分を積極的に活用し、新規開業支援なども視野に入れながら、粉河寺から商店街への人の流れをつくり、商店街機能の回復を図る。

ア、県道粉河寺線の歩道にアート平板・街路灯にモニュメントを設置

イ、空き店舗の開業支援として補助金支給

ウ、新規開業希望者を募るPR活動

エ、県道粉河寺線で道路規制を行い、定期的な青空市場の開催

オ、粉河町商工会や紀州粉河街づくり塾の活動の支援

②粉河寺との連携不足

近年の健康ブームの後押しもあり、公共交通機関を利用した、徒歩での観光地散策が最近では多く見受けられることから、JR和歌山線などとも協力し、粉河とんまか通り商店街を散策する観光客の滞在時間延長を目指す。また、粉河寺とも連携した定期イベント等も実施する。

ア、粉河寺で、音楽イベントを開催

③高齢化及び後継者問題

商店街の空洞化を、空き店舗対策などを積極的に利用して防止し、商店街全体の売上額を底上げする。また、新規開業者を増やすことによる地域間連携による廃業防止にも努める。

ア、粉河寺参拝客（高齢者）をターゲットにした商品を扱う店舗開業を目指す。
例えば、お年寄りの原宿「巣鴨地蔵通り商店街」のような方向性でターゲットを絞り、店舗運営を高齢者でもでき

るようなものに改変する。

④駐車場整備の遅れ

当商店街内へ新たな駐車場用地を確保することが困難であるため、粉河寺周辺駐車場、粉河駅南側広場周辺の空き地を利用し、商店街への人の流れを確保する。

ア、紀の川市土地開発公社などの連携協力で、有効的な土地利用促進

記載した問題点の克服や、まちづくりを考えるうえで、「地域との協働」の中から様々な意見や情報を把握することが重要であります。

現在、とんまか通り商店街の活性化を目指す自主団体「紀州粉河街づくり塾」や「KOKO塾（粉河高校と和歌山大学主催による地域公開型講座であり、高校生と地域住民から見た街づくりと商店街の現状をテーマ）」などと積極的に連携して事業支援を行います。

また、商店街関係者だけでなく、粉河地域の活性化や観光振興をも視野に入れ、地域住民とも一体となったまちづくりを目指します。

現在のとんまか通り商店街の業種構成（通りに面した街区の商店数：粉河町商工会調べ）は、下図のとおりで、図で示したものは13ページに記載しています。

業 種	粉河とんまか通り商店街店数		
	H3年	H19年	増減
小 売 業	78	48	△30
衣料・身回り品	20	23	3
飲食料品	23	10	△13
自動車・自転車	0	0	0
家具・建具・什器	11	1	△10
その他	24	14	△10
卸売業	3	0	△3
飲食業	8	5	△3
サービス業	17	11	△6
その他	20	16	△4
合 計	126	80	△46

■本当の「学び」は地域社会にある

和歌山県立粉河高校
校長 實宝 正芳さん

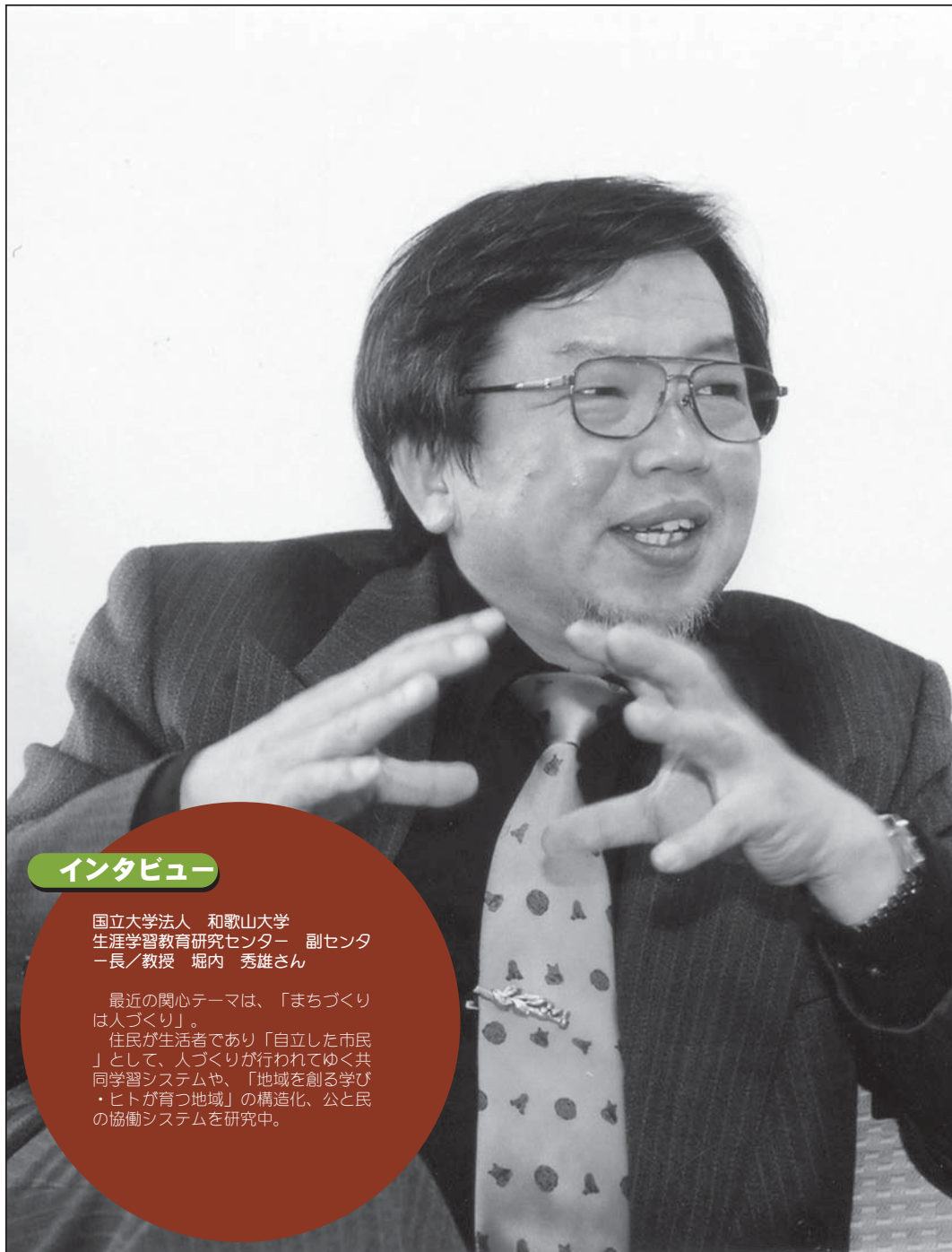
「他人に迷惑をかけなければよいというだけではダメなんです。」
微笑みながら、教えてくれるのは、地元粉河高校の校長、實宝 正芳さん。通常の教室での学習だけでは、学ぶことができないことがたくさんあるようだ。

「社会の中でしか学べない、人として大切なもの、それは市民性なんです。規範意識や言葉使い、態度やおもいやりの心などは、KOKO塾のような地域の人たちと接触できる機会に醸成されるんです」

「実際、KOKO塾が開設されて5年経ちましたが、生徒たちは、その後メンバーを核として、徐々に変わってきています。校内に来場されるお客さまにもあいさつができるようになってきましたよ。つまり、本当の「学び」は地域社会にあるんですよ」

学校を変えようというテーマから始まったこのKOKO塾。五感で体験できる学びの原点が、確かにここに存在する。





インタビュー

国立大学法人 和歌山大学
生涯学習教育研究センター 副センタ
ー長／教授 堀内 秀雄さん

最近の関心テーマは、「まちづくりは人づくり」。
住民が生活者であり「自立した市民」として、人づくりが行われてゆく共同学習システムや、「地域を創る学び・ヒトが育つ地域」の構造化、公と民の協働システムを研究中。

■やはり、人づくりが基本です

堀内 秀雄さん

「行政としてもっと真剣に考えてほしい部分も多くあるように感じています。たとえば、この粉河の商店街（粉河とんまか通り商店街）が、なぜ衰退していったかの原因です。まずはそのことをきちんと整理したうえで対応を模索することが大切です」

鋭い論評を提起するのは、和歌山大学生涯学習教育研究センター副センター長の堀内秀雄さんだ。

堀内さんは、K O K O塾の運営を当初から関わってきている中心人物の一人。K O K O塾産みの親の一人である前粉河高校校長の山口裕市さん（現和歌山県教育長）が、堀内さんに大学の協力を要請したのがきっかけで、この企画の運営に関わるようになった。堀内さん自身も、高校を核としたまちづくりに、興味をもった。

最近の関心テーマは、「まちづくりは人づくり」。耳慣れた言葉だが、話を伺ってみるととても興味深い。

■なぜ、粉河の商店街が衰退したのか

「粉河の商店街が衰退した理由には、外的な要因と、内的な要因の二種類があります」

「商店街の活性化は、何をもちて達成できるかと考えますか？ それは、そこで生活する人が、楽しめる空間が必要なのです。大型店舗や郊外型の大駐車場を備えたマーケットなどが、車社会の到来で増し、行政の規制がなかったからです。それまでの商店街は、店頭に並ぶ商品に対して蕩畜（うんちく）を語る商人などの文化性や、郷土の物産などが並ぶ環境性がそこには存在しました。だから、その場所は客と会話できる場所、

つまりコミュニティが存在したのです。しかし、大量生産で価格をとことん抑えた商品をそろえるそんな大型店に客足をとられるようになった。品揃えが豊富で、広い駐車場があれば、なおさらそっちは人は流れます。当然の成り行きです。これが外的な要因です」

「一方、内的な要因は、時代の流れに、商店街は抵抗しきれなかったということです。つまり、そこで生活する商店街の人たちが、楽しめなくなってきた理由は三つにわけられます。一つは、自分たちの街の風情や文化とかを、楽しむ人が少なくなったこと。二つ目は、さびれていくことに対して、街の人がよくしようとす意識が薄くなった。三つ目は、さびれていく街に痛みを感じない人が多くなった。つまりあきらめムードがでてきたということでしょう」

■街は自分の家と同じです

「まちづくりには三つの要素があります。一つはハードのまちづくり、二つ目はソフトのまちづくり、三つ目はハート（心）のまちづくり、つまりそれは「やる気」ですね」

「街は自分の家でもあり、外に対しては顔です。ですから我が家意識で街を見る必要があります。異論を唱えるだけではなく、協働や、それからネットワークも重要です。商店街の人だけと違って、周囲の人らがみんな心をあわせて、考えたり、行動したりすることが大切です。まずは、先進地（人）から学ぶことです」

「住民の中に、こぞって危機感に乏しいような気がします。必死になって街を良くしようとする人たちが、もっと現れてほしいものです。自分の家としたら、誰もが生き生きとした場にしたいと思っているはずですよ」

● ● ●

わずかな時間での取材であったが、堰（せき）を切ったように、一気にお話をしていただいた。

それでも堀内さんは、一朝一夕に、まちづくりは成しえないものと考えている。時間をかけて、ゆっくり醸成していけばよいと考えている。なぜなら、以前存在した魅力ある商店街は、長い年月を経てきた文化の塊であったからだ。

■粉河は大きなマグネット

紀州粉河街づくり塾
会長 楠 富晴さん

「もともと僕は、大阪の企業に就職して、設計図面をつくったり、都市計画を担当したりするなどの、技術職だったんです。ところが、親父が病気で倒れた時、会社を退職し、今の家業の酒屋を継ぐことになりました。地元に戻ってきて、商工会に入れてもらって、あらためて自分の生まれ育った郷土を見たとき、このままやったら、このまちは、いつかは衰退してしまうんじゃないかなという不安を肌で感じました」と、話してくくれるのは、紀州粉河街づくり塾の会長 楠 富晴さんだ。

「粉河のまちには大きなマグネットがあるんです。西国巡り三十三箇所の第三番札所である粉河寺には、町の人口が1万7千人ぐらいの時、観光客が年間60万人来てくれていたんです。その人たちの多くは、粉河寺で朱印をもらったら、すぐに4番の次の札所に向かう。こんなもったいない話はないと思うんですよ。もっと長い時間、この粉河に滞在してもらわないと、もったいないですよ（笑）」

粉河寺を中心とした門前町としてのかつてのような賑わいを、もう一度取り戻そうと、この紀州粉河街づくり塾が結成された。そのためには、今までみたいに行政に任せっきりでなく、自分たちのまちを作っていこうと拳を握った。そこで、ひとつの方法として、自分たちの商売から少し間隔をあけて、別の視点からまちの活性化を探ってみようと考えた。

まずは、今年7月、「七夕フェスタ」を開催した。JA紀の里と協力して、朝取り野菜がならぶ朝市や、フリーマーケットとを組み合わせた市民や観光客らの参加型イベントだ。

そして楠会長は言う。

「商店街の人たちだけではなく、各団体が手弁当で協力して、この七夕フェスタを開催できたことはうれしいですね。商店街が衰退すれば、地域の人と人とのコミュニケーションがなくなってしまう。今日のこのイベントを第1歩

に、ネットワークを広げて、定期的なイベントに育ててゆきたいですね」

約10年前から、東京都の早稲田商店街で行っている「エコステーション」というリサイクル事業に、楠さんは注目している。この方法を、粉河とんまか通り商店街風に取り入れて、まちの活性化につなげてゆきたいと思っている。

これは、商店街の一角に回収機が設置されており、空き缶やペットボトルを入れるとゲームが楽しめたり、さらには当たり券がでると、商店街で買い物をすると、景品がもらえる仕組み。環境問題と関連づけながら、消費者と商店の経営者がお互いが得するようなシステムだ。

またほかに、高齢者にやさしい、利便性の高い配送システムなども、街づくり塾のメンバーは検討している。

いずれにしても、このような活動ができるのは、粉河町商工会の支援があつてのことと、楠さんは感謝している。

こういった工夫を凝らした仕組みづくりを、みんなで考えてみることから、本物の連帯意識が生まれ、楽しみながら、まちづくりに参加できるような街になってゆくことが最終目標。

このためにも、商店街は、現存する粉河寺などのスーパー観光資源などと一緒になって、まちづくりに関わっていくこと、また、商店街だけのメンバーではなく、周辺の一般の人たちと一緒に、まちづくりに関わっていくことの大切さを訴える。

真摯な楠さんらの、アイデアもエネルギーも、無尽蔵だ。

■■■■■紀州粉河街づくり塾設立の経緯■■■■■

□昭和44年

旧二チイが開店するにあたり、商工会の指導によって「KS会」を設立される。今後の大型店の対抗策として、シール事業などを展開する。

□昭和55年

商栄会・北振会が発足する。しかしながら、車社会への対応の遅れや、大型SCの進出などによって、商店街小売店の売り上げが伸び悩む。また、経営者の高齢化・後継者不足などの問題が浮き彫りになってくる。

・平成18年
粉河町商工会で、商店街活性化に向けての検討委員会が設立される。

□平成19年2月

KS会が解散

□平成19年4月

紀州粉河街づくり塾が設立される。

■■■■■紀州粉河街づくり塾の事業■■■■■

①地域の特性の活用・共生・復活→粉河寺

・門前市場や骨とう市場を模索
・桜祭りや難流し

②既成概念にとらわれることなく→商業振興

③今のおかれている現実を直視→高齢化

・それぞれの商店の特性を活かすネットワークの構築
→御用さき・一括配達
→将来は医療機関と住民との窓口に
→情報伝達の基地局として紀州粉河街づくり塾の位置づけを目指す

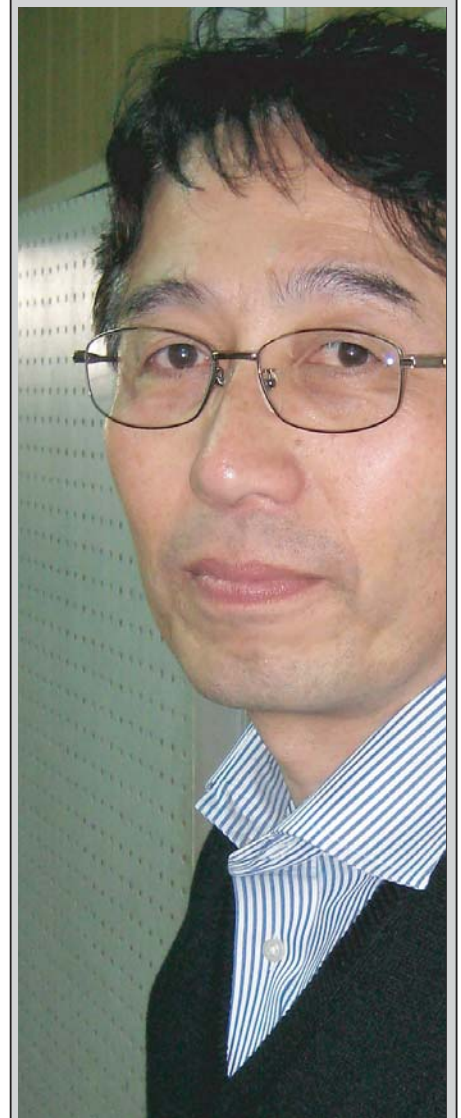
④住民参加の取組み→環境

ア、KOKO塾（環境班）と連携し、KOKOSOS30（ゴミゼロ）の認定制度を創設し、自分たちの環境基準をつくる。
認定基準は、ボランティア活動・清掃作業への参加（リサイクル資源の協力・タバコのポイ捨て禁止運動・環境イベントへの参加）→認定証の発行 → 協賛店での買い物で特典・抽選参加権の獲得
イ、エコステーション（早稲田商店街を参考に）

⑤商工関係だけではなく各機関との連携→協働

・学校、JA紀の里、郵便局などの団体と協力して活動する
たとえば、七夕フェスタやオープンカフェの開催を定期的に行う。

このように楠さんたちは、「まちづくり」に参加し、活性化を図りながら、最終目標を、商業振興と、門前町の復活や、世代を超えた連帯意識の熟成としている。



紀州粉河街づくり塾
会長 楠 富晴さん

楠 富晴さんは、平成19年4月に設立されたまちづくりグループ「紀州粉河街づくり塾」の会長だ。粉河とんまか通り商店街のメンバーが中心になって、今、あらたなまちづくり活動を展開している。



KOKO塾まちづくりグループの阪口翔太さんは、この企画の中心人物。今年はスタンブラリーやガラスアートの体験コーナーを設けることを提案した。
当日の会場では、経験があったガラスアートの指導を行い、「オープンカフェを毎年恒例のイベントにできれば…」と目を輝かせる。
スタンブラリーは、参加者に商店街のお店でスタンプを押してもらい、10個集まれば、このオープンカフェで使える100円券と交換してもらえるシステム。ごく単純な仕掛けだが、参加者に商店をまわってもらえることが最大の目的。学生らしいユニークなアイデアだ。



開催前の一週間は、学生スタッフも準備作業に大忙し。

放課後、地域の人たちも高校にあつまり、一緒になってオープンカフェの打ち合わせ。現役学生たちと、地元住民らが、ひとつの目標に向かって、アイデアを出し合いながら考える。会場内での人の流れを想定しながら、テーブルやテントの位置を決めてゆく。



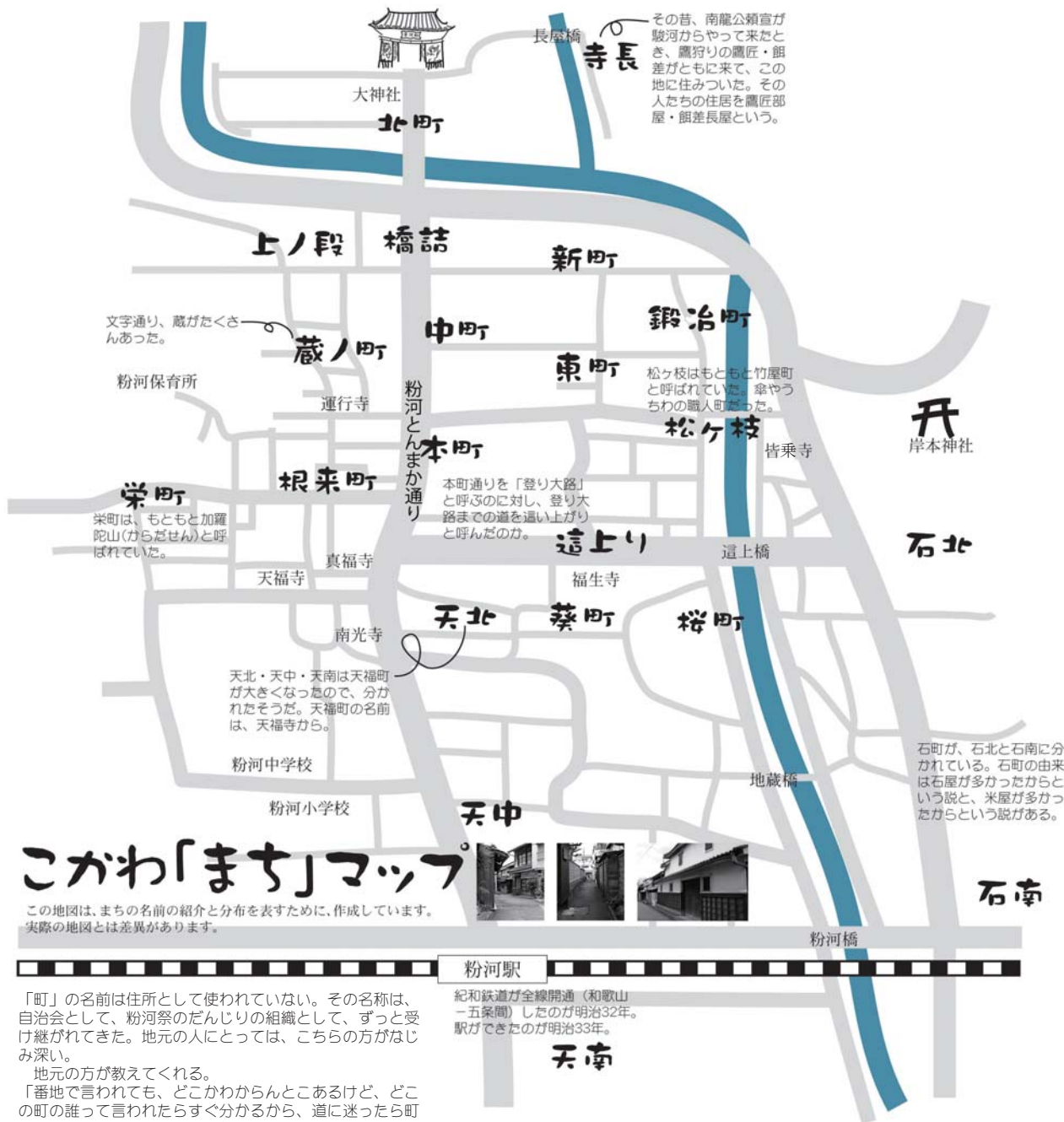
オープンカフェでの一番の人気メニューは、なんといっても名物「うどん」。粉河高校ホール（学生食堂）で、昭和29年からこの名物うどんを作り続けているのは永井保子さん。昆布と鯉節で丁寧にだしをとり、約50年続いた伝統の味だ。「わたしのうどんを学校で食べた子らのうち、孫をもってる子らもいてら〜。懐かしい子らが、こんな機会（一般の人たちが自由に食べにくることができるオープンカフェ）に食べにきてくれたら、ほんまにうれしいわあ」と、元気のいい声で話してくれる。

粉河高校の卒業生たちが、永井おばちゃんを取り囲み、懐かしい名物うどんの味を舌鼓。ささやかな同窓会に、会話が弾む。

■商店街に現れたオープンカフェ

粉河とんまが通りの勝田胃腸科の駐車場に設けられたおしゃれなオープンカフェ。一日限りの手作り喫茶店だ。接客を担当した粉河高校3年生の山崎夕美さんは、「お客さんと他愛ない話をしたり、人とふれあいが持てることが楽しい」と、笑顔で話してくれる。

これは、粉河高校と和歌山大学、地域の人たちが一緒に学ぶ、粉河KOKO塾のまちづくりグループの活動のひとつ。粉河高校の朝水亜弥子教諭は「まちを知ることから始め、まちおこしとして何ができるかを考えて、数年かけて到達したひとつの結果がオープンカフェです。来年どうなるかは、これからの学び次第ですね」と話す。KOKO塾は未知の発展性を秘めている。



■歴史を訪ねる

「粉河とんまか通り商店街が、門前町として発展し始めたのは、おそらく室町時代のことだろう」

栄町に住む増田博さんにお話を伺う。



増田博さん

当時は粉河寺の門前を、大きく北町、中町、南町と分けていたようだ。本通りの商店街が栄えると、その店に出す品物を造る職人街が、通りの東側にできた。それが鍛冶町や竹屋町(現在の松ヶ枝町)、石町などだ。

一方、それらの店に卸をする蔵が通りの西側にできた。これが、蔵ノ垣内(現在の蔵ノ町)。

また、街道筋に、根来小路(現在の根来町)や加羅陀山(からだせん、現在の栄町)もできた。そして江戸時代の前には、すでに17の町ができていた。

やがて江戸時代に入り、行政上では「粉河村」となり、「村」とは、公的には農村を表した。しかし、このあたり紀の川も近く、水運貿易が盛んであったり、粉河寺の門前という条件を備えていたため、実際は城下町のような町場が形成されていた。商業も産業も作問稼(さくまかせぎ、農業の合間に商売をすること)という名目で営まれ、大いに発展した。そして北町や中町、鍛冶町といった名前もそのまま使われていた。村の中にまちがあるこういった町のことを、「在町(ざいまち)」と呼ばれていたらしい。

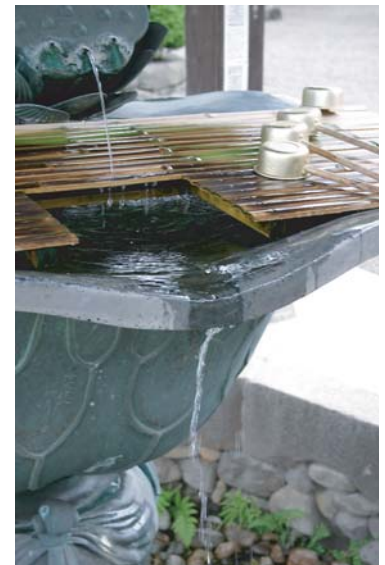
産業の発展は、多くの職人を生み出した。なかでも、粉河鋳物は全国的に有名で、蜂屋正勝をはじめ、たくさんの職人が活躍した。鍛冶町は、文字どおり鍛冶屋(鋳物)の町だった。火を扱うため、火の神を鎮めるためか、鍛冶町の人たちが秋葉山の神社を造ったという話は有名だ。

明治時代に入ると、生活様式の変化などによって、産業にも変化が現れた。それまで、鋳物、うちわ、酢、酒造り、大工、石工が多かったが、職人がよその地へ移ったり、綿(めん)ネル、帽子、製糸などの産業に変わっていった。

粉河鋳物の職人は、昭和40年代まで、中田元清という人がいたが、残念なことに、鍛冶町には鐘を作る職人はもう住んでいない。

その後、大正、昭和、平成と、時代の移り変わりとともに、産業も町並みも変わっていった。現在もその変貌の渦中にあるのかも知れない。

粉河寺境内の盥漱盤(かんそうばん)は、清浄水を流す器。五代目蜂屋正勝の作。



第4章 長期総合計画の体系

1. 政策目標

本市の将来像『いきいきと 力をあわせたまちづくり 夢 あふれる 紀の川市』の実現に向け、次の5つの政策目標のもとまちづくりを推進します。

◆政策目標1◆

【協働】

ともに参加し行動するまち
～みんなで力を合わせよう～

◆政策目標2◆

【人づくり】

すこやかで感性豊かな人が育つまち
～思いやりを持ってたすけあおう～

◆政策目標3◆

【基盤づくり】

快適で活気があるまち
～いきいきと暮らそう～

◆政策目標4◆

【環境づくり】

環境にやさしいまち
～自然を大切にしよう～

◆政策目標5◆

【行財政】

健全な行財政運営をするまち
～みんなで取り組もう～

2. 施策目標

施策目標は、政策目標を実現するために、施策によって具体的に実現する目標です。

特に、商店街活性化に直接関係が深い、上記に示した目標のうち、『政策目標3：【基盤づくり】 快適で活気があるまち～いきいきと暮らそう～』は、具体的には次の二つの項目で位置づけています。

□《都市基盤》道路・交通や住環境などが整い、日常生活が便利で快適である

地域の計画的なまちづくりに基づいて道路や上水道、情報基盤といった生活基盤が整備されているとともに、公共交通が充実し、医療施設や商業施設などの市民の生活拠点施設が整備され、市民が身近な地域で利便性の高

い快適な日常生活を送っているまちを目指します。

また、市民が安全に安心して暮らせる災害に強いまちを目指します。

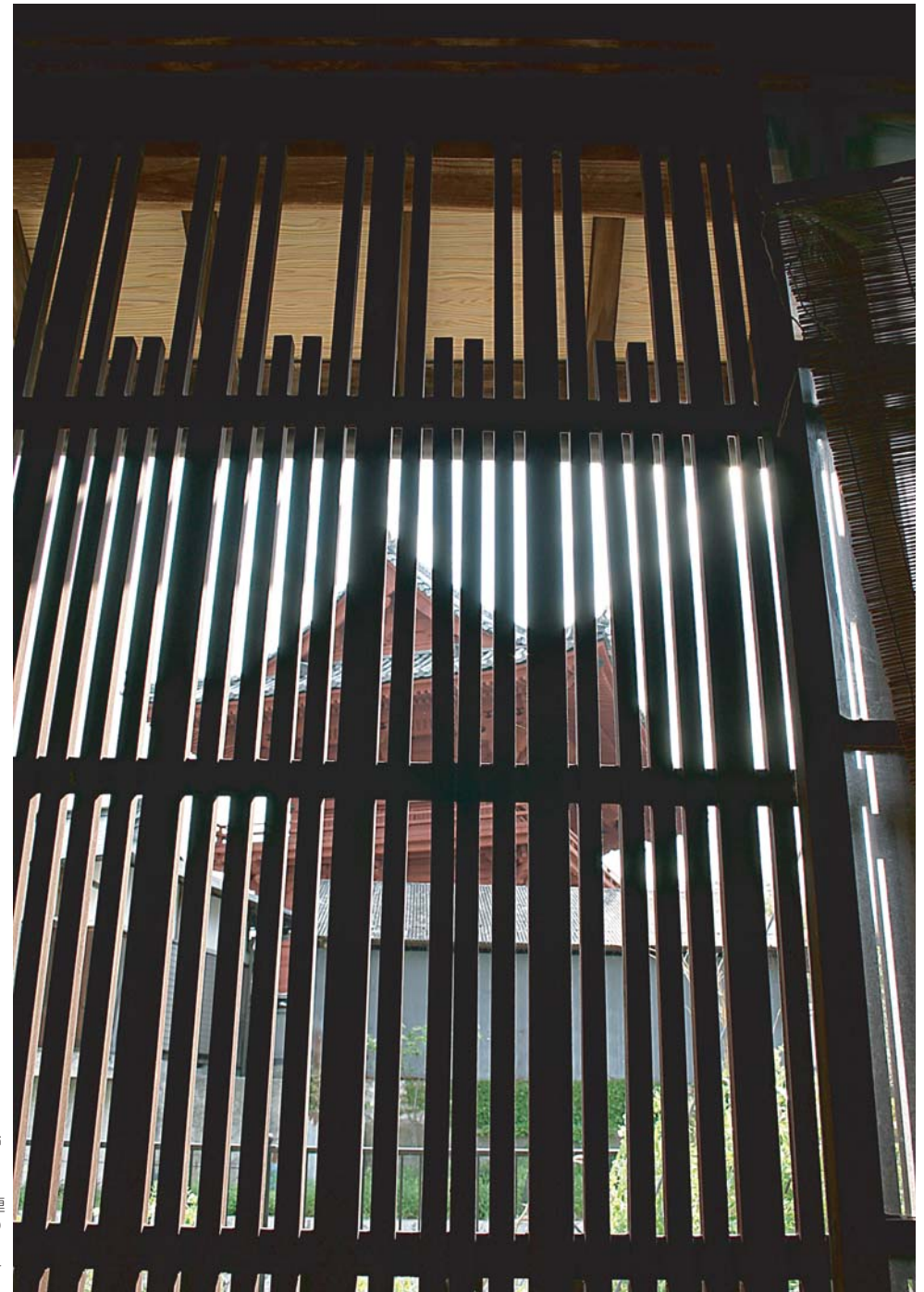
□《農業・産業振興》農業や地域産業に活気があり、生きがいをもって働いている

地域の資源や特性を活かした地域産業の振興や企業誘致により、若者等の働きがいのある就業機会が確保され、だれもが意欲を持って働いている活気にあふれているまちを目指します。

また、基幹産業である農業を中心に新たなブランド製品の創出や意欲ある担い手の育成支援などに取り組むとともに、観光地づくりや観光ネットワークの充実を図り、市外の人々が訪れ、産業に活気があるまちを目指します。

■門前町の象徴「連子格子」は江戸時代への誘い

先人の知恵がたっぷり詰まった連子格子から望む粉河寺の大門。この基本計画書の表紙にあるような造りの家では、粉河祭の際には連子格子を取り外して見物します。



東西連携軸

都市間の広域的な交流・連携を担う東西軸として、国道24号と県道と歌山橋本線を位置づけます。市内各地域の市街地、主要拠点を結び、本市の道路ネットワークの骨格をなす東西道路としての交通利便性を高めていきます。

鉄道軸

本市の地域づくりと広域的な交流・連携を担う生活路線として重要な役割を果たして

いるJR和歌山線とわかやま電鉄貴志川線の活性化を支援するとともに、市民の利用を促進します。

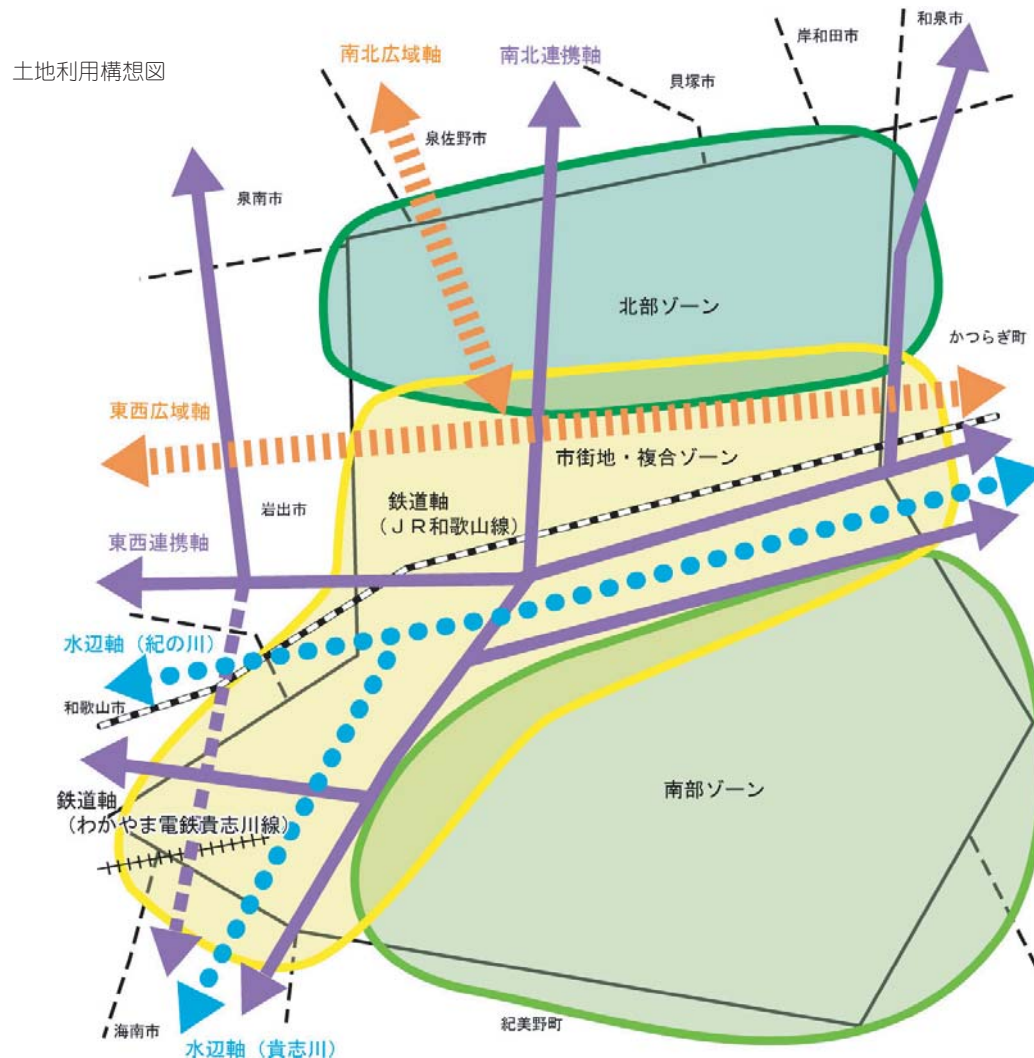
水辺軸

市内の水辺軸として、紀の川及び貴志川の河川を位置づけます。市内を流れる中小河川や農業用排水路、ため池等とのネットワークにより、水と緑のうまい環境を形成し、水辺の自然とふれあい、憩えるアメニティ機能を、安全にも配慮しながら高めていきます。

南北連携軸

大阪方面、関西空港方面と連絡する広域的な交流・連携を担う南北軸として、国道424号と府県道泉佐野打田線を位置づけます。北部の打田、南部の貴志川、桃山の市街地及び海南市とを結び、本市の道路ネットワークの骨格をなす南北道路としての交通利便性を高めていきます。

また、国道480号や府県道泉佐野岩出線の南伸道路についても南北の府県間道路として機能を果たすため、整備を働きかけます。



■昭和40年のとんまか通り

粉河駅前で、鳥居カメラ店を営む主人に借りた当時の家族写真。道幅は狭く、片側に車を駐車すれば、もう片方には停車できないほどの道幅だ。



■現在のとんまか通り

電柱を地中に埋め、すっきりとした景観になった商店街中心を貫く県道粉河寺線（通称、粉河とんまか通り）。街路樹として使用しているのは花見月（はなみづき）。写真中央奥は、西国三十三箇所第三番札所である粉河寺の大門。

■教育とまちづくりを1つに考える

山口教育長は、平成13年粉河高校校長へ就任当時、思っていた。「荒れていた学校を良くしたい」また、粉河地域の街中を歩いていた時ごみが散乱し、活気を失った商店街を目にし、思った。「まちを良くしたい」そこで、教育面と社会面の両方を1つに考えて、平成14年、KOKO塾を立ち上げた。

初めは、年に4回程度「公開講座」を開催し、和歌山大学の教授等に講演してもらい、まちづくりに関しても話の中に盛り込んだ。

1年目は、チラシ作りから始まり、参加者の募集や、会場のいす並べに至るまで全ての作業をほとんど山口校長1人で行っていた。やがて、他の職員や、生徒も、楽しみながら次第にのめり込んでいき、協力してくれるようになっていった。

■人との出会い

粉河高校の生徒の約8割が、大学との連携講座を受けてみたいという希望があった。そこで平成15年から、5つのワーキンググループをつくり、大学教授を核に年齢、職業、分野を超えて主体的な学びを創る場をつくった。当時PTA会長であった恩賀要さん（現商工会副会長）らや、当時の商工会関係者らの協力もあって、地域との関係が濃密になってゆき、KOKO塾が大きく成長していった。そうして、地域と学校との交流が増え、地域から学校への苦情も少しずつ少なくなっていった。

■まなびの郷（KOKO塾）

山口教育長は、時々、KOKO塾のことを「まなびの郷」と表現する。どちらも同じことですが、話を伺っていると、地域と学校が一体となり、連携し、日々進歩している「ひとつの町」のような情景が浮かんでくる。

まなびの郷（KOKO塾）で先日（平成19年秋）、行われた粉河本通り商店街でのオープンカフェは、大盛況であった。このように「まなびの郷」を通じて、参加者や地域の人とのふれあいや喜びの声を聞くことによって、決して無理をせず、押し付けでもなく、自分たちが考え、楽しみながら色々なことを発見する。これらのような地域社会へ貢献できた喜びが、次の活動につながる原動力になっていると山口教育長は、語る。

和歌山県教育委員会
教育長 山口 裕市さん



昭和43年に和歌山県教育庁に採用され、後、和歌山高校などで教壇に立つ。平成13年から粉河高校校長に就任し、平成17年退職。平成19年4月から現職。

(2) 将来人口

本市のこれまでの人口推移をみると、各種推計人口結果からは、平成12年以降一貫して減少傾向にあります。国全体の人口減少が進むなかで、本市の人口減少に歯止めをかけることは難しい状況にあります。子育て支援策の充実や活力ある産業の振興、都市基盤の整備、若年層の定住魅力を高める取り組みなどにより、人口の定着に努めなければなりません。そして、そのようなまちづくりの成果として目指す人口は、推計人口を上回る現状程度の人口規模を確保することを目標にすべきであると考えます。

推計人口の結果を踏まえ、これらの人口の減少に歯止めをかける施策を総合的かつ一体的に展開することによって、転出者数を減らすことで達成される目標として、2017年（平成29年）における紀の川市の将来人口を70,000人と設定します。

3. 土地利用構想

本市は、紀の川水系や和泉山脈、紀伊山地などの豊かな自然に囲まれて、市民生活や産業等の都市活動が営まれる市街地や田園集落が広がっています。

将来の都市像の実現に向け土地利用を推進するにあたっては、地域の特性を活かすとともに、地域を取り巻く社会情勢を考慮しながら、自然と都市との適正な共存を図る必要があります。

そのため、具体的には、今後、本市が策定する都市計画マスタープランなどにおいて、地域の特性に応じた土地利用のあり方を定め、地域に即した適切な土地利用を進めていきます。

ここでは、その基本的な考え方として、本市の目指す都市像の姿を表現した土地利用の方向性を次のように定めます。

(1) ゾーン

土地利用として一体的に、都市的土地利用の計画的な整備や自然的土地利用の環境保全を図るべき区域をゾーンとして設定します。

北部ゾーン

和泉山脈の南斜面を望む森林一帯を、緑豊かな自然の保全とふれあいを図るべきゾーンとして位置づけます。森林の育成管理や治山・治水を進め、自然保全機能を高めると

もに、森林の観光レクリエーション機能を高めていきます。

市街地・複合ゾーン

和泉山脈のおおむね山ろく部から紀の川を南北に、貴志川を東西に挟む地域を市街地・複合ゾーンとして位置づけます。国道24号や国道424号沿道を中心に行政・文化・商業等の機能が集積する秩序ある良好な市街地を形成するとともに、農業生産地としての基盤整備と集落生活環境整備を進め、市街地と農地が共存する環境を高めていきます。

また、整備予定の京奈和自動車道インターチェンジの広域高速交通機能の利便性を活かしながら、既存の果実・園芸農業や工業等、地場産業における広域交流機能を強化し、新たな産業、観光農園、観光レクリエーション等が複合した機能を高めていきます。

南部ゾーン

紀の川以南の紀伊山地の森林及び点在する山間集落一帯を、緑豊かな自然の保全とふれあいを図るべきゾーンとして位置づけます。森林の育成管理をし、山間集落の定住維持を支援し、森林の自然環境の保全や美しい景観形成に配慮しながら、自然学習や余暇空間としての森林の観光レクリエーション機能を高めていきます。

(2) 都市軸

都市を構成する要素の一つで、都市活動を支えている骨格となる交通動線や地勢上の河川を都市軸として設定します。

東西広域軸

和歌山県、奈良県、京都府をつなぐ府県間の広域的な交流・連携を担う軸として整備予定の高規格幹線道路の京奈和自動車道を位置づけます。京奈和自動車道インターチェンジと市内の主要幹線道路や京阪神方面へのアクセスを強化し、広域高速交通機能の利便性を高めていきます。

南北広域軸

京奈和自動車道の打田ICから関西国際空港を結ぶ南北軸として、（仮称）紀の川関空連絡道路（高規格幹線道路）を位置づけ、整備を強く推進します。

■歩道に設置するモニュメントを 利用してまちづくり

粉河町商工会
会長 大西洋太郎さん

「JR粉河駅から、粉河寺までの間の約1キロメートルある商店街通り（県粉河寺線）を、歩いてもらうことが大事なんです。そのためには、各商店の努力はもちろんですが、その通りの町並みも整備する必要があります。昭和40年ごろから着手した粉河とんまか通りである道路拡張工事は、平成16年によりやく完成し、電柱の地中化や街路樹の整備、また街路灯の設置を行ってくれました。そこで今回は、すでに設置されている街路灯や歩道に、歩くことを楽しむ工夫をしたいんです。それは、街路灯に、粉河の歴史にちなんだモニュメントを取り付けたり、歩道にアート平板を埋め込んだりして、観光客のみならず楽しんでもらいながら、この通りを歩いていただきたいのです」

目を輝かせながら、粉河町商工会長の大西洋太郎さんは話してくれました。

「でも、それを取り付けるだけで、観光客が増えるとは思っていません。それに加え、「地域」に住む私たち住民の工夫を投入する必要があります。たとえば、商店街の中の空き家などを利用して、休憩所や公衆便所を設置したり、道路を定期的に歩行者天国として車両規制を行い、市場やフリーマーケットを開催し、その行事を観光イベントとして定着させます」

「基本的に、このまちは、宿泊を伴った観光視点よりも、世界遺産である高野山や、南紀白浜への観光行程の寄り道客を、できるだけ長い時間、粉河に滞在してもらいたいんです」

「店頭で鍛冶の実演をしながら、包丁などの商品を販売してはと、以前、粉河寺大門前の鍛冶屋さんに申し上げたことがあるんです。でも結局、後継者がいないという理由で実現できなかったんですけど（笑）」

「商店街の後継者たちは、老後の社会保障など、将来のことを考えると、どうしても、サラリー者になりがちです。収入も安定している…。でも、そんな時勢ですが、それでも商店として生き残るためには、大型店にはできないことをする必要があります。目先の儲けに走ってしまうのではなく、小売店でなければできないサービスや、宣伝が必要なんです」



粉河とんまか通り商店街の歩道に設置されている街路灯



粉河町商工会長の大西洋太郎さんは、街路施設を整備したそのあとの活動、つまり、活気ある門前町の復活を目指す情熱ある市民活動が大切だと話してくれる。

林業においても、後継者不足等により適正に管理されていない森林が増えていることから、計画的な育林を進めていく必要があります。

商工業については、商店街の後継者不足等からかつての活気が失われている状況にあり、今後、市内商工業者の一層の連携等の推進により、商工業の活性化を進めていく必要があります。

4. 自然との共生からみた暮らしやすい環境づくりに向けた課題

和泉山脈と紀伊山地に囲まれている本市は、森林や農地、農業用排水路、ため池、紀の川や貴志川など水と緑の豊かな自然環境に恵まれ、数多くの動植物が生息し、都市近郊で身近に楽しめるハイキングコースとして知られている地域でもあります。自然とのふれあいや環境学習を通して、動植物の生態系や自然の大切さなどについて理解を深め、この美しい自然環境を次世代へと継承していくことが求められています。

また、地球温暖化をはじめ地球規模的な環境問題が深刻化するなかで、森林は温暖化ガスの二酸化炭素の有効な吸収源として着目されており、本市の森林保全の重要性も高まっています。

さらに、環境面では、限られた資源を有効活用した持続可能な社会の形成が求められており、個人レベル・地域レベルでの取り組みが重要となっています。ごみ減量やリサイクル推進など市民一人ひとりの生活環境に対する意識改善を促し、人と自然が共生する循環型社会の実現に向けた取り組みが求められています。

5. 地方分権化からみた行財政運営に向けた課題

本市では、2007年（平成19年）3月に「紀の川市行財政改革大綱」及び具体的な改革事項を掲載した「紀の川市行財政改革集中改革プラン」を策定・公表し、現状の事務事業等を検証したうえで、今後重点的に取り組むべき改革事項の目標を定め、その達成に向けて集中的かつ積極的に行財政改革を進めていくこととしました。

今後も、本改革プランに基づき、最少の経費で最大の効果が得られる行財政運営を目指

し、庁舎機能の再編や組織体制の整備、事業の抜本的な改革を行うとともに、より質の高いサービスを迅速に提供できるよう行財政運営の効率化に努めることが求められています。

第3章 紀の川市の将来像

1. 都市の将来像

本市は、長年にわたって各地域で培われてきた自然環境、伝統、文化、そして産業といった地域固有の資源が多数あり、合併により一層充実した豊富な魅力ある資源を有することになりました。さらに、それらの貴重な地域資源を培ってきた人と人、人と地域の多様な出会いが生まれ、新たな交流の輪が広がりつつあります。

本市の恵まれた自然環境や文化資源を通じて、人と人とのつながりを大切にしなが、誰もが安心して夢や生きがいを持ちながら、いきいきと暮らし続けられるような都市を目指すとともに、市民と行政が互いに連携し、地域のことは地域で考えるという基本姿勢にたった力強い地域力に満ちたまちづくりを進めていくために、都市の将来像を次のとおり定めます。

紀の川市の都市の将来像

『いきいきと力をあわせたまちづくり
夢あふれる紀の川市』

2. 将来人口

(1) 推計人口

① コーホート推計

本推計は、国立社会保障・人口問題研究所による「都道府県別将来推計人口（平成19年5月推計）」と「都道府県別将来推計人口（平成14年3月推計）」における仮定値及び本市の平成12年、平成17年住民基本台帳人口を基本とし、コーホート要因法により推計した値です。

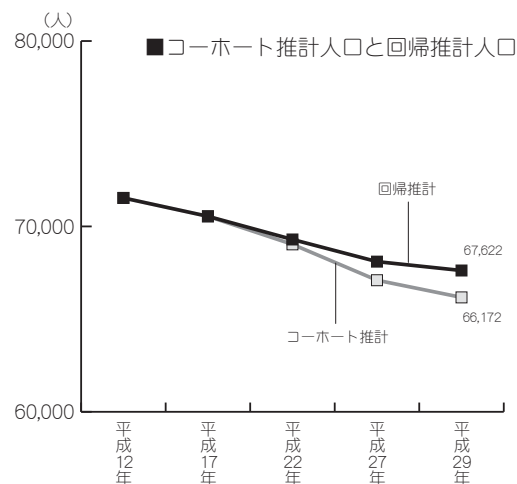
基本構想の目標年次である2017年（平成29年）では、人口は66,172人と推計されます。また、年齢三区分別人口では、年少人口（0～14歳）が10.6%、生産年齢人口（15～64歳）が58.5%、老年人口（65歳以上）が30.9%、老

年人口（65歳以上）が30.9%の見通しとなっています。

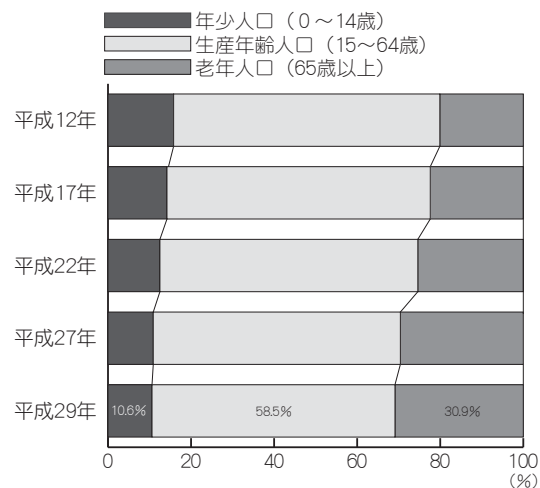
② 回帰推計

本推計は、紀の川市の2000年（平成12年）以降、2007年（平成19年）までの各年3月末現在の住民基本台帳人口をもとに回帰推計した値です。

基本構想の目標年次である2017年（平成29年）では、人口は67,622人と推計されます。



■ 住民基本台帳人口を基本にしたコーホート要因法による年齢三区分別人口の割合



■ 劇場映画を誘致

フィルムコミッション事業として、平成19年に、粉河とんまが通り商店街のメンバー達は、劇場映画を誘致した。ある者は、自分のお店を撮影場所に提供したり、またある者は、伝統の粉河祭のだんじりを、撮影道具に使用できるように段取りに東奔西走し、約200人の周辺の住民が、この映画撮影に協力した。劇場映画として、全国に粉河周辺を映像として情報発信できる素晴らしい機会と考えたからだ。

その映画、今年春、全国上映される「ふるさとをください」だ。



■ 協力してモノをつくる大切さ

ボランティアの映画エキストラとして、市内在住のみなさん、女優の鳥丸せつこさんと記念写真をパチリ。上中和利さん（鳥丸せつこさんの左隣）は「映画の難しさ、楽しさがよくわかりました。それから、みんなと力をあわせて、協力してモノをつくる大切さもわかったような気がします」と感想を話してくれた。



7. 広域交流の活発化

交通体系や情報通信網の整備、自由時間の増大にともない、経済活動や日常生活における人・物・情報の流れが市域や県境を越えて広域化しています。

特に、インターネットや携帯電話の普及に代表される高度情報通信技術の飛躍的な発展により、情報化は企業活動のあり方を変えるだけでなく、人と人のコミュニケーションのとり方など、市民生活の面でも大きな変化をもたらしていますが、その一方で、情報を悪用した犯罪が拡大し、情報の安全確保や個人情報保護が課題となっています。

また、国際化や経済のグローバル化の進展において、海外から日本を訪れる外国人観光客及び就労の在日外国人、留学生等も増加し、地域社会において海外の文化や外国人と接する機会が拡大しており、世界的視野で物事を考え、行動することが求められています。

さらに、豊かな自然環境に恵まれた地方都市では、高齢化や定住人口の減少にともなう地域活力の低下が著しい状況にあることから、近接する自治体間や、活力と賑わいのある都市部との連携を進めることが求められています。

特に、自然・歴史・産業といった地域資源を最大限に活用した交流人口の増大を図り、地域の活性化へとつなげる取り組みが重要となっています。

第2章 紀の川市の主要課題

1. 少子高齢社会からみた参加協働のまちづくりに向けた課題

紀の川市の人口は、住民基本台帳人口によれば、1999年（平成11年）の71,654人を境に減少に転じ、2005年（平成17年）には前年から5.5%減少し70,545人となっています。また、高齢化率については、全国的な傾向と同様に上昇しており、2005年（平成17年）の老年人口では22.4%となっており、同年の国勢調査の老年人口でも紀の川市は23.1%であり、全国の20.2%と比較するとやや高くなっています。高齢化の進行や人口減少は今後さらに加速し、それにより地域活力が減退して

いくことが危惧されています。

また、近い将来、発生することが予測されている東南海・南海地震や頻発する風水害などの自然災害に対する不安や、事故や犯罪等の増加による安全意識が高まっています。特に本市は、活断層が存在することから、安全安心対策は大きな課題です。人と人とのつながりや伝統的な相互扶助の精神が非常に重要となっており、市民の防災意識・安全意識を啓発するとともに、自助・共助による地域の安全力を高めることが求められています。

さらに、地方分権化の流れを受けて、「地域のことは地域で行う」という考えのもと、地域や世代を越えた市民交流を活性化させ、地域の住民同士の結びつきを強めるとともに、市民、地域、市が連携した協働のまちづくりが求められています。

2. 思いやりと心の豊かさからみた人づくりに向けた課題

本市は、2006年（平成18年）11月1日、紀の川市民がよりよいまちづくりを行うために定めた行動規範である紀の川市民憲章を制定し、郷土愛・人権・勤労・生涯学習・感謝などの大切さをうたっています。

そして、2007年（平成19年）3月27日、この紀の川市民憲章の理念に基づき、「学ぶ・結ぶ・育む」をスローガンに生涯にわたり自ら学びながら心豊かな人間性を培い、人と人を結び調和のとれた明るく活力ある紀の川市を育むことを目指し、「生涯学習のまち 紀の川市」宣言を行い、生涯学習センターを拠点とした取り組みを進めているところです。また、本市には貴重な人的・知的資源を有する大学が存在し、この大学と連携した人づくりを進める必要があります。

すべての人が人として生きるための基本的な人権が守られ、誰もが個性と能力を発揮し、生きがいや目標を持って充実した生活を送ることができる社会を実現しなければなりません。

また、都市型ライフスタイルの浸透や価値観の多様化などにより、人と人とのつながりが希薄化し、隣近所に気軽に相談したり、互いに助け合うという相互扶助の考え方が失われつつあるなかで、特に、家庭内における育児や介護への影響は大きく、家族の精神的負担の割合が高まっています。介護予防に力点を置いた健康づくりを進めながら、介護が必要となった場合でも、地域内で必要なときに必要なサービスを享受できる体制を構築する

ことが必要です。

さらに、「子どもは地域の財産」として捉え、地域みんなで子どもたちの健やかな成長を見守り、子どもを産み育てやすい環境を整備するとともに、学校・地域・家庭が一体となり、次世代を担う人材を育成することが求められています。

3. 地域特性からみた快適で活気ある基盤づくりに向けた課題

市民が長く住み続けたいと思うまちづくりを実現するためには、利便性、快適性、さらに安全性を備えた都市基盤を確保することが求められます。

京奈和自動車道の早期整備や府県間道路の整備を推進し、市内外の広域的な交流を促進していくとともに、市内道路ネットワークの構築と、バス等の公共交通機関の拡充を図り、市内を自由に移動できるよう、市民の交通利便性を高めていくことが求められています。

また、地震や風水害などの自然災害に強い安全・安心なまちづくりを進めながら、上水道の安定供給や下水道の整備、情報基盤などのインフラの整備・拡充、魅力ある商業施設の形成など、利便性・快適性を高めるとともに、緑地・公園の充実など豊かな自然環境と調和したまちづくりを進め、若年層や都市居住者の定住の魅力を高めることが求められています。

さらに、人口減少の歯止めや就業機会の確保等の観点から、企業立地の発展と増加はもとより地域産業の振興を図るため、高度な技術を有する企業への支援を強化し、大学等の研究開発機能を活用した産官学の連携も重要であります。

特に、本市の基幹産業である農業については、農家の高齢化、担い手不足等により、遊休農地の増加や農業の活力の低下を招いており、今後、生産基盤の整備・生産体制の強化などの農業の体質強化に努める必要があります。また、安全・安心な農産物の提供や新たなブランドづくりの展開なども進めていかなければなりません。

そして、豊富な地域資源を有効に活用しながら、農業体験や産直市などを通じて農業をより一層身近に親しんでもらえるように観光との有機的な連携を図るとともに、地産地消や食育の推進にも取り組んでいく必要があります。

■お茶も飲んでもらえる饅頭屋に！

粉河寺大門前で、饅頭屋を営む千崎祐直さんは、粉河高校を卒業後、大阪の調理師専門学校でお菓子作りを学び、京都の饅頭屋の老舗「松屋」で5年修行した。その後、父親が営んでいた饅頭屋を継ぎ、笑顔堂の2代目となった。

今、餅や饅頭を自家作業場で作り、配達や店頭に立つこともある。

「粉河寺の参拝客も年々減っているから、売上げもかなり落ち込んでいます。でも、店を少し改造したりして、お茶も気軽に飲んでもらえるような店造りにして、少しでも経営改善に役立てたいです」

と、若き後継者は話す。

饅頭「笑顔堂」
千崎 祐直さん（34歳）

サンタクロースの衣装を着ているのが千崎さん。紀州粉河街づくり塾の活動として、観光特産センターこかわ前で、クリスマスフェアのお楽しみ抽選会を行っている様子だ。これは、キャンペーン期間中に、商店街での買い物で、抽選券がもらえる仕組み。12月22日と23日の二日間で、約1500回ガラガラが回ったとか。



第1章 社会潮流の把握

1. 少子高齢社会の進展

国立社会保障・人口問題研究所における「日本の将来推計人口（平成18年12月推計）」（出生率中位仮定）によれば、わが国の総人口は2005年（平成17年）の約1億2,777万人をピークに減少傾向となり、2050年（平成62年）には1億人を切って9,515万人となることが予測されています。

また、2005年（平成17年）で20.2%の高齢化率は年々進み、2025年（平成37年）には30%を超え、2055年（平成67年）には40.5%という超高齢社会を迎えることが推計されています。

こうした人口構造の変化により、経済・社会の主たる担い手となる若年労働人口が減少し、社会全体の活力低下を招くとともに、税収の減少や社会保障費の増加などが懸念されています。

そのため、地域全体で子どもを安全に安心して生み育てられる環境を整備するとともに、高齢者の健康づくりや介護予防、働く場の創出や生きがいづくりなど、高齢者が自立して心豊かに暮らせるような社会を形成していくことが求められています。

また、多くの自治体においては、人口増加を前提とした社会システムを見直し、歳出の抑制や組織のスリム化など行財政の抜本的見直しを進めていくことが必要となっています。

2. 価値観・ライフスタイルの多様化

私たちの価値観が、「物質的豊かさ」から「心の豊かさ」をより重視する傾向へ変化するなかで、単身世帯の増加や女性の社会進出、労働時間の短縮化等、人々のライフスタイルは多様化しています。特に、都市型の生活スタイルの広がりにより、晩婚化・未婚化、出生率の減少や、伝統的な地域社会とのつながりの希薄化などを招いています。

また、労働時間の短縮化や団塊世代の大量退職などを契機に、余暇時間が増大し、個人の自発的な社会貢献に対する意識が高まっています。

今後は、世代や性別によらず、市民一人ひとりが個性と能力を発揮し、それぞれの責任と価値観に基づいた生き方が可能となる自由度の高い社会が求められています。

3. 暮らしの安全・安心の確保

阪神・淡路大震災以降、増加傾向にある大地震や、近年頻発している風水害など、自然災害に対する安全性確保の要請が飛躍的に高まっています。また、交通事故や身近な犯罪だけでなく、子どもを狙った凶悪犯罪や高齢者を対象とした詐欺事件、インターネット犯罪など、犯罪の種類も多様化しています。さらに、環境ホルモンやアスベストといった健康被害や食品の安全性に対する不安などが高まっています。

そのため、市民一人ひとりの安全意識を高めるとともに、地域の安全は地域で守るという考えに基づいた地域づくりを目指し、市民・地域・行政が一体となった取り組みが求められています。

4. 循環型社会への転換

大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済活動は、私たちに多くの恩恵をもたらしてきましたが、一方で、自動車の排気ガスによる大気汚染や生活排水による河川の汚濁、また廃棄物の増加や身近な自然の減少など環境への負荷を高めるなど環境問題を引起しています。

そして、このような環境問題は、地球温暖化、オゾン層の破壊などの地球環境問題にもつながり、人類の生存基盤である地球環境にも重大な影響を及ぼしています。

地域のかけがえのない環境や限りある資源を次世代へと引き継いでいくためには、市民一人ひとりが自らのライフスタイルを見直し、リサイクルや省資源・省エネルギーの意識を醸成していくとともに、市民・行政・事業者がそれぞれ責任をもち、連携しながら、環境に対する影響を最小限とする方策を講じるなどの循環型社会の形成への取り組みが求められています。

5. 産業・雇用構造の変化

わが国の産業は、製造業の海外生産が進む中で、第1次産業及び第2次産業の比重が低下し、サービス業など第3次産業の比重が増すとともに、労働集約型から知識集約型への産業構造の転換が進む一方、派遣労働やフリーター等が出現し、終身雇用や年功序列型を特徴とするわが国の雇用構造・雇用者意識も大きく変化しています。

また、地域経済と密接な結びつきを有して

いた第1次産業及び第2次産業の低迷等により、地元雇用の受け皿が縮小し、中心市街地の賑わいや居住者の減少、農地の遊休化が進み、地域活力の低迷を招いています。特に、農業は、地方都市における基幹産業であり、農業の活力の低下が地域の活力の低下に直結するという問題をはらんでいます。

しかし、農業の多様化や食生活の変化に伴い、日本の食料自給率が低下する一方で、国民の食の安全性に対する意識は年々高まっており、特に都市居住者の農産物への関心が高まっていることなどから、今後も農業が担う役割は非常に大きいと考えられます。

今後は、農業をはじめとした地域固有の産業振興を進め、雇用環境を創出するとともに、地域にふさわしい企業の誘致や、短時間労働や在宅勤務など市民の多様な働き方を支えるまちづくりが求められています。

6. 地方分権化の推進

2000年（平成12年）4月に成立した「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律（地方分権一括法）」を受け、国から地方への事務権限の委譲にともない、各自治体は、「自己決定」、「自己責任」の原則のもと、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を担うこととなりました。

同年12月には、行財政改革を推進していくための組織体制のあり方や事務事業（業務）の進め方などの基本的な方針・方向性を示す「行財政改革大綱」が閣議決定され、それに基き各自治体では行政改革大綱が策定されました。

さらに、2005年（平成17年）3月には「地方公共団体における行政改革の推進のための新たな指針（新地方行革指針）」が総務省より公表され、各自治体では従来の行財政改革の見直しとともに、行財政改革の実施計画とも言うべき「集中改革プラン」の公表が要請され、限りある財源で最大の効果を発揮できるよう、着実な行財政改革の推進が求められているところです。

■商店街のお嫁さんたち



木村真喜子さん（写真左）・有本良子さん（写真右）

商店街でお隣同士の二人は、木村真喜子さんと有本良子さん。木村さんは「めん平 木村金物店」の奥さんで、奈良県出身。一方、有本さんは「カットクラブ しんじ」の奥さんで、三重県出身だ。

「また今月もあそこのお店が、店をたたむ。そのことを、当たり前のように受け入れてしまうようになってしまったんです。後継者がある方も少ないし、駐車場もないし…。せめて、この商店街にしか売っていないものがあればねえ」

と話してくれたのは、木村さん。
「土日となると、特に人がすくなくさびしいです」

と話してくれるのは、有本さん。

■脇道にも、りっぱな観光資源

日ごろ何気なく見過ごしている風景がある。でもその中に、超一級の写真素材があったり、見事な景色が存在していたりする。

晩秋、老夫婦が仲良く、首からカメラをぶら下げ、粉河寺の参拝を終えた様子で、とぼとぼと駅の方に歩いてた。

その二人がふと足を止め、とんまが通りから細くつづく裏町の方に目をやっている。次の瞬間、

二人はそれぞれのカメラポジションで、ファインダーをのぞいていた。

二人が去ったあと、自分もファインダー越しに、その場所でシャッターを切った。

今まで気がつかなかった景色が、くっきりとカメラに切り取られていた。

少し、感動した。



はじめに

紀の川市は、2005年（平成17年）1月に旧打田町、旧粉河町、旧那賀町、旧桃山町、旧貴志川町の合併によって新たに誕生しました。

少子高齢社会の進展や地方分権型社会への転換、日本経済の低迷に伴う行財政基盤の改革など社会情勢が大きく変化するなか、市町村合併による効果を最大限に発揮しながら、豊かさやゆとりを実感できる新市紀の川市の実現を目指し、市民と行政が手を取り合い、自らのまちを築き上げていくことが求められています。

こうした中、本市の商業は、高齢化社会やモータリゼーションの進展、またライフスタイルの変化などを背景に、商店街の活気が衰退し、空洞化が進んでいます。

そこで、今回策定しました、『紀の川市商店街活性化基本計画「門前町りばいばる」』は、紀の川市の歴史的景観や、観光資源を活かし、地域の商店主や、地域の住民と一体となった活動、またそこに住む人たちの思いを著した計画としています。

また、新たな時代に対応した新しいまちづくりを総合的かつ計画的に進めるため、中長期的視野に立って、どのような市民生活や地域社会が実現していけることを目指すのか、また、そのために何をすべきか、市民の生の声をあえて表し、市民の視点から分かりやすく示した商店街活性化基本計画を策定しました。

もくじ

第1章 社会潮流の把握…2

第2章 紀の川市の主要課題…3

第3章 紀の川市の将来像…4

第4章 市長期総合計画の体系…6

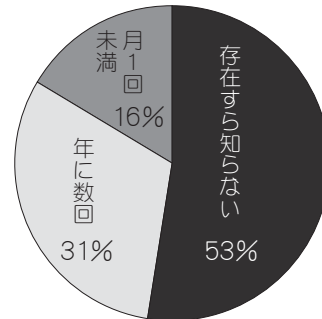
第5章 粉河とんまか通り商店街の現状と課題…12

第6章 アンケート結果…18

まず、第6章のアンケート結果で記述しています内容の一部を紹介します。

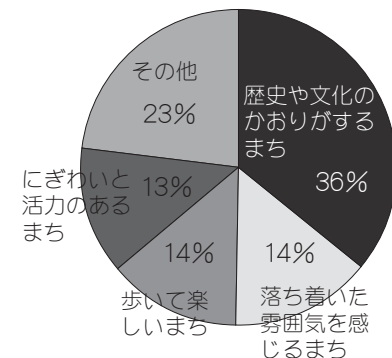
粉河寺に訪れた市外からの参拝客のみなさんに伺いました。

『この付近にある粉河とんまか通り商店街で買い物をしたことがありますか？』（110人回答）



粉河寺に訪れた方のうち、粉河とんまか通り商店街を知っている方（市内外）に伺いました。

『粉河とんまか通り商店街が、どのようなになればよいと思いますか？』（153回答）



これらの結果からもわかるように、粉河寺への参拝客（市外）の半数以上は、すぐ近くにある粉河とんまか通り商店街の存在すら知りません。

また、この商店街を知っている方のうち、6割以上の方が、歴史や文化を大切にしたい、落ち着いた雰囲気のある、歩いて楽しい街並みを希望しています。

■ 空き家を利用した眼医者さん

となりまち桃山町出身の橋爪奈津子さんは、知り合いの紹介で、このとんまか通りに眼科を開業した。空き店舗を利用し、家主の理解もあって、この地に開業することができた。今から4年前のことだ。

橋爪さんの出身高校は、すぐ近くにある粉河高校。また母親の実家がこの粉河の川原地区ということもあって、幼いころからの思い出もいっぱい詰まっている地域だ。でも、彼女の記憶の中ではこの辺り、昔のころの方が、にぎやかで活気があったらしい。

「周辺のみなさんも、とても親切してくれま

す」

「でももっと、オシャレなお店もあっていいですね」

「それに、春の花見シーズンともなれば、JRを利用して、結構この通りを観光客の方々も歩くんですよ。そんな人たちにも、もっとこの商店街を利用してほしいですね」と、明るく話してくれる。

この商店街通り（県道粉河寺線）は、長い歳月を経てようやく、平成16年に大掛かりな道路改修を完了した。同時に電柱を地中に埋設し、カラーコンクリート舗装を施し、様相が生まれ変わった。所々に、以前栄えた門前町の面影を保ちながら…。

はしずめ眼科／院長 橋爪奈津子さん

表紙写真の左側の建物は、空家を利用した橋爪さんの職場だ。



第6章 アンケート結果

■粉河寺周辺で、観光客や周辺の住民の方々にアンケートを行いました。結果は18ページに掲載しています。

【実施日】

- ①平成19年12月2日（日）
- ②平成19年12月9日（日）
- ③平成19年12月18日（火）
- ④平成20年1月1日（祝）
- ⑤平成20年1月2日（水）

【アンケート数】

144名（その内市内在住49名）

1、こちらに來られた際の交通手段は？	
徒歩	19
自転車	14
バイク	4
自動車	97
バス	1
JR	5
タクシー	0
その他	3
無回答	1
計	144

2、あなたのお住まいは？	
市内	49
県内	32
大阪府	44
その他	17
無回答	2
計	144

3、この街へよくおいでになりますか？	
毎日	15
週2～3回程度	11
週1回程度	9
月2～3回程度	15
あまり来ない	26
初めて	9
年1～2回	44
その他	11
無回答	4
計	144

4、今日この街に來た目的は？（複数回答）	
観光	75
買い物	7
飲食	2
通勤・通学	1
仕事	10
役所・銀行・病院などの用事	4
理美容・クリーニングなど	0
文化施設の利用	2
その他	49
無回答	5
計	155

5、この近くにある粉河とんまか通り商店街で買い物をしたことがありますか？			
	市内在住	市外在住	計
存在すら知らない	1	58	59
年に数回	8	34	42
月に1回程度	3	10	13
週に数回	3	2	5
したことがない・ほとんどしない	3	6	9
無回答	3	13	16
計	21	123	144

6、この近くにある粉河とんまか通り商店街を、ご存じの方に伺います。商店街通りがどのような街にしたいですか？（2つまで回答）			
	市内在住	市外在住	計
歴史や文化のかわりが漂うまち	9	46	55
にぎわいと活力のあるまち	10	10	20
落ち着いた雰囲気を感じるまち	3	19	22
もてなしの心を感じるまち	3	3	6
歩いて楽しいまち	5	16	21
安心して歩ける人にやさしいまち	1	10	11
その他	2	2	4
無回答	1	13	14
計	34	119	153

■粉河とんまか通り商店街の経営者の方々にアンケートを行いました。結果は19ページ以降に掲載しています。

【実施日】

平成19年12月上旬

【アンケート数】

52店主

■「粉河寺でラインダンス？… 大歓迎ですよ！」

粉河寺 管長 逸木盛修さん

アンケートなどの結果から、「粉河寺との共存が、まちづくりの大きな課題である」という意見が多く寄せられた。

そこで、粉河寺管長である逸木盛修さんに、ズバリ伺った。「粉河寺として、商店街との共存や、まちづくりに協力してゆくことについて、どのようにお考えですか？」

「極めて難しい問題ですね。とにかく特効薬はないと思います」と前置きして、微笑みながら、話してくれた。

「とにかく、わたしは、寺や境内を綺麗にすることを心がけています」

管長は、36歳まではサラリーマンだった。その当時、昭和30年代から40年代にかけて、巡礼者たちはごぞって、こう漏らしたらしい。

「りっぱなお寺すなあ。でも、かなり荒れてますなあ」

植木や草、ごみなどが放置されていて、お世辞でも美しいとは言えない寺であったようだ。

その後、逸木管長は、「このままではいかん」と、寺やその周辺の木々を、キチンと手をくわえて美観に努めてきた。そのおかげで、いまでは、ごみ一つ落ちていない、とても美しい寺に、変貌している。

粉河寺本堂



また、逸木管長は、ホームページを製作し、粉河寺の情報はもとより、粉河寺にまつわるホットでユニークな情報を発信し、イメージアップを図っている。

「とにかく、わたしはホームページに関して思うのは、常に新しい情報をみなさんの発信することが大事だと思っています。でもそれが結構大変なんですよ（笑）」

逸木管長自身、パソコンを使うというから驚きだ。

それでも、参拝客の数は、平成4年をピークに、ゆるやかな減少傾向にあることをさびしそうに話してくる。

「周囲のみなさんで、まちづくりにこの寺をもっと利用してほしいです。東大寺でOSK歌劇団がやったラインダンスもいいですね（笑）。そのためには寺は協力を惜しみませんから」

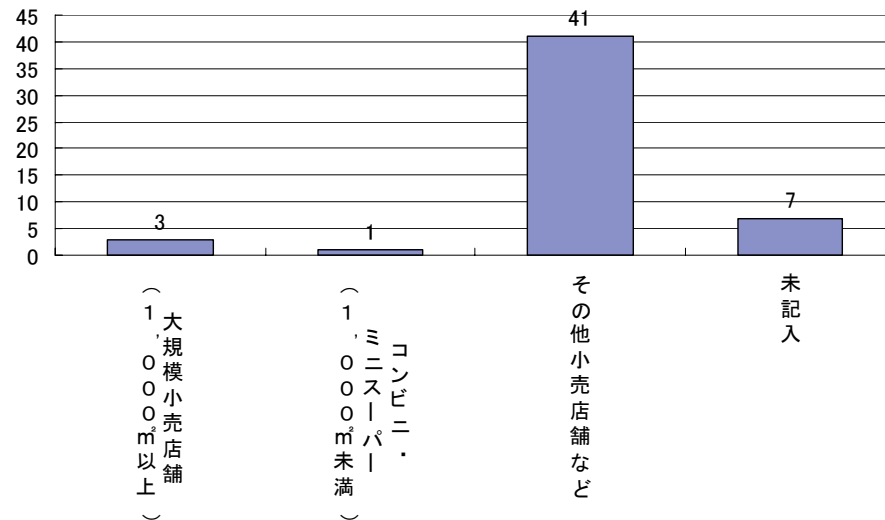
団塊の世代の退職などで、今後の参拝者はある程度見込める可能性はあるものの、少子化の影響で、やはり将来展望は、決して明るいものではないと、粉河寺管長は考えている。

しかし、まちづくりに特効薬はないとしながらも、試行錯誤のなかで、周辺の人たちと一緒に、まちを盛り上げたいという粉河寺管長の情熱が伺える。

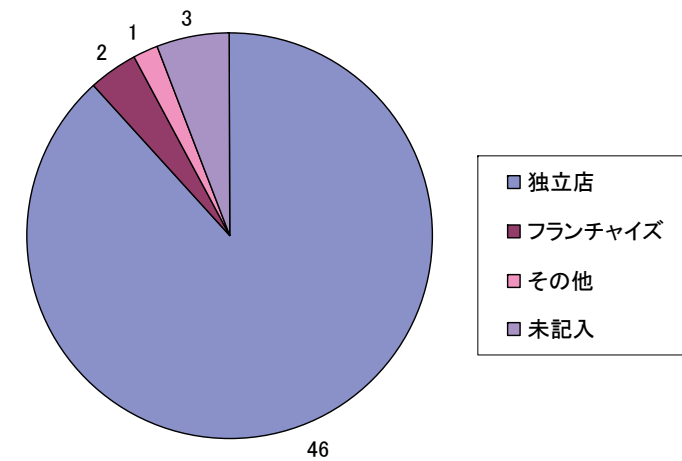
粉河寺管長 逸木盛修さん



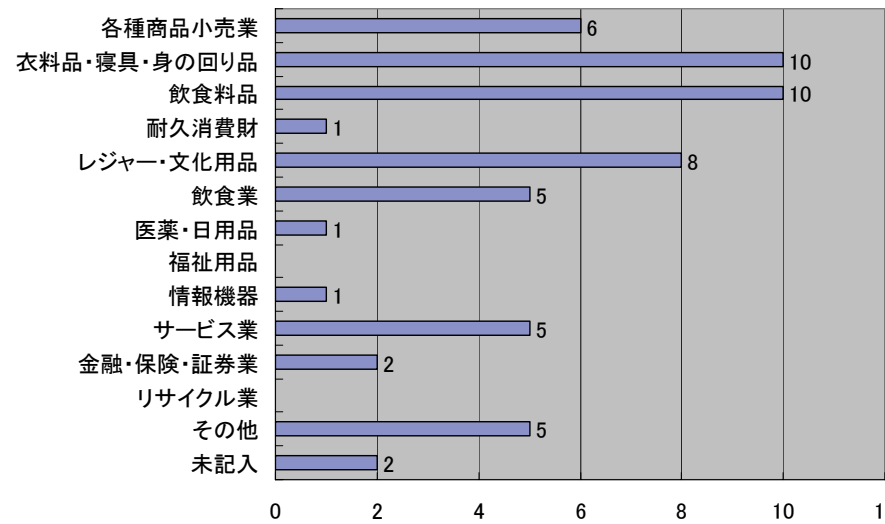
1. 店舗の種別



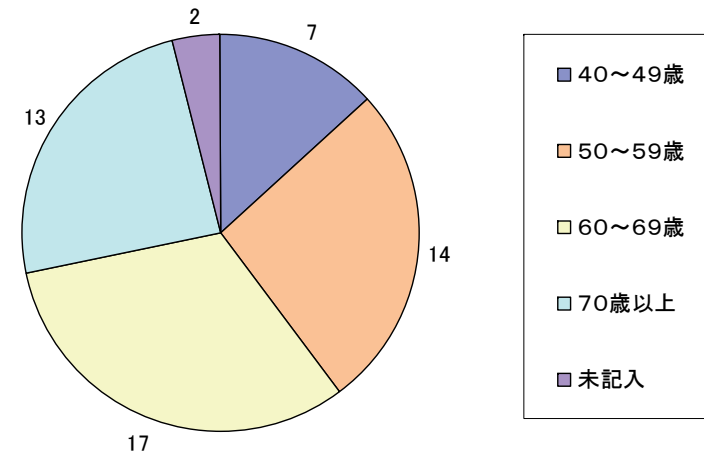
3. 経営システム



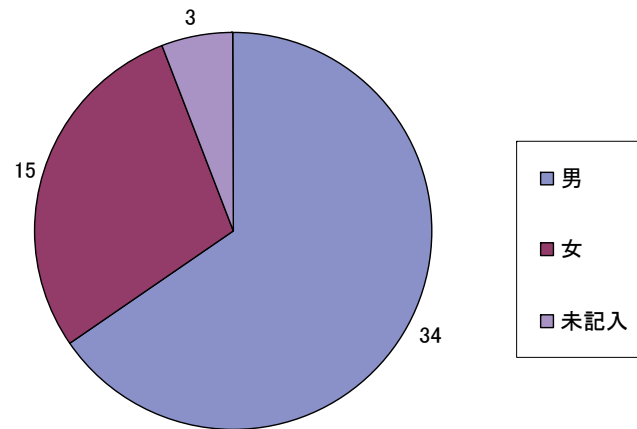
2. 業種



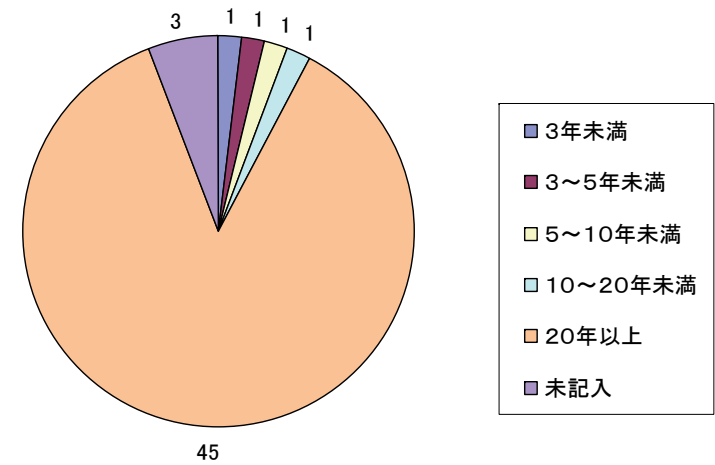
4. 経営者の年齢



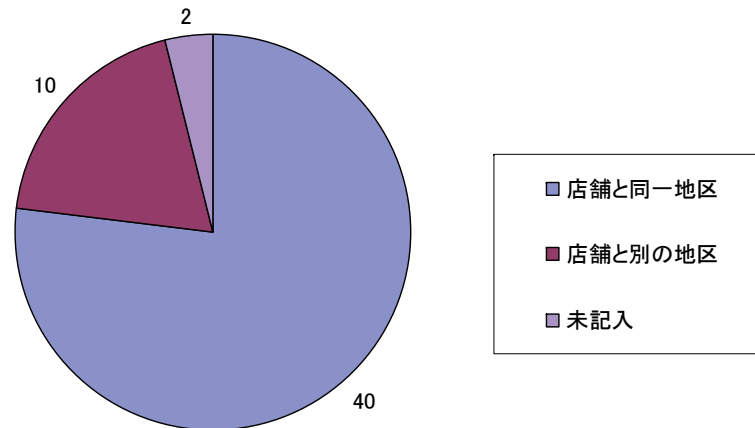
5. 経営者の性別



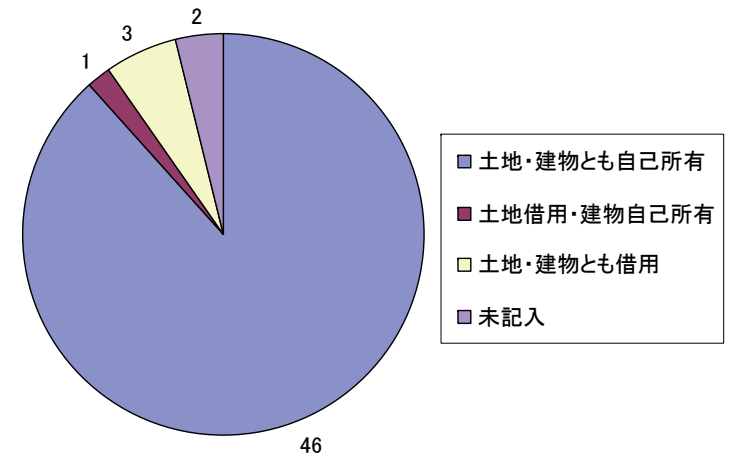
7. 現在地での経営年数



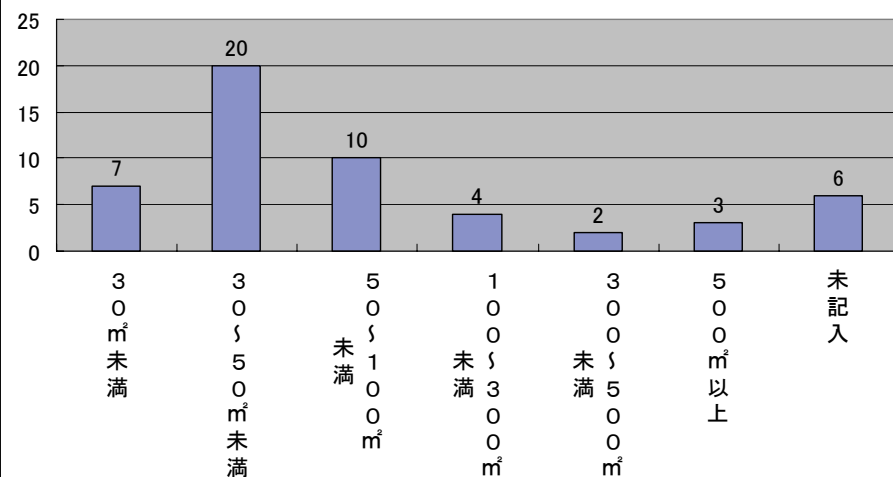
6. 経営者の住まい



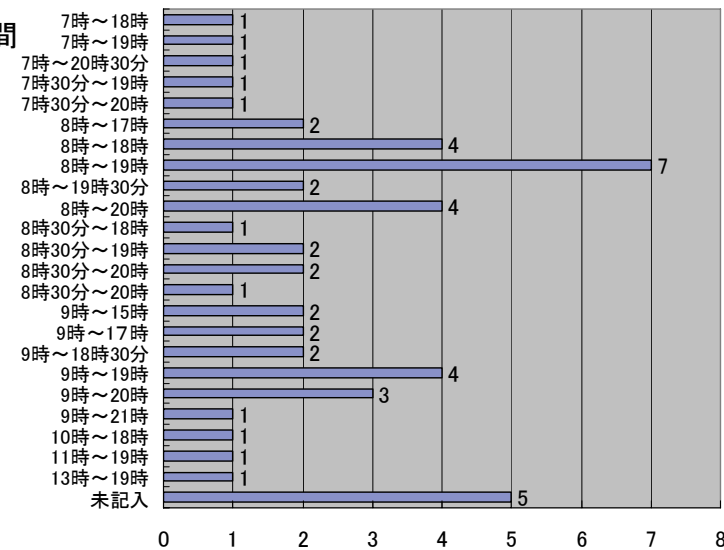
8. 土地・建物の所有形態



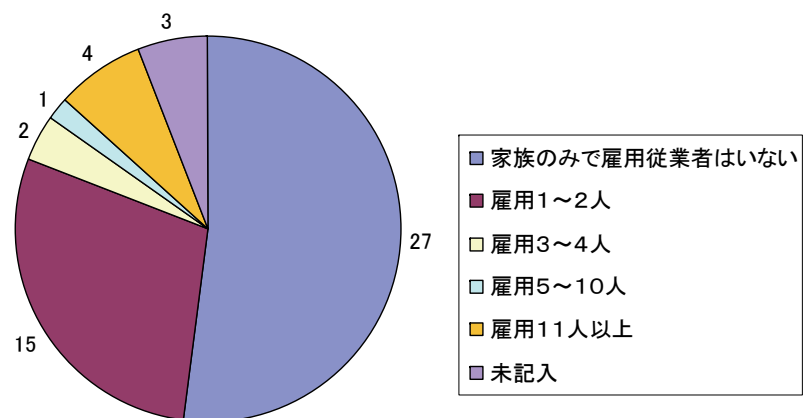
9. 売場面積



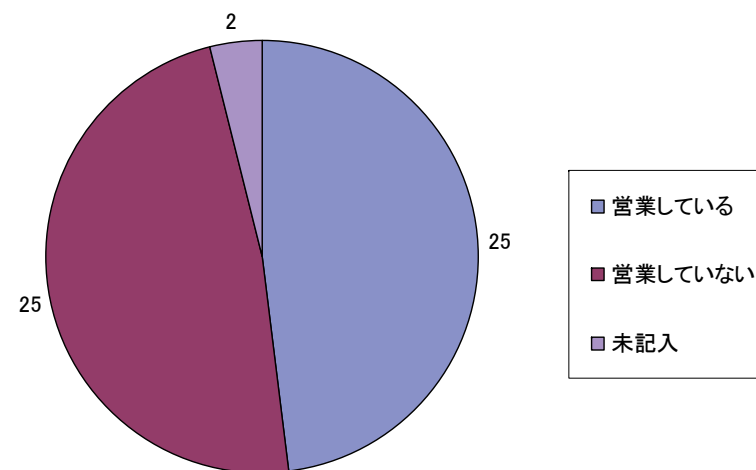
11. 平日の
営業時間



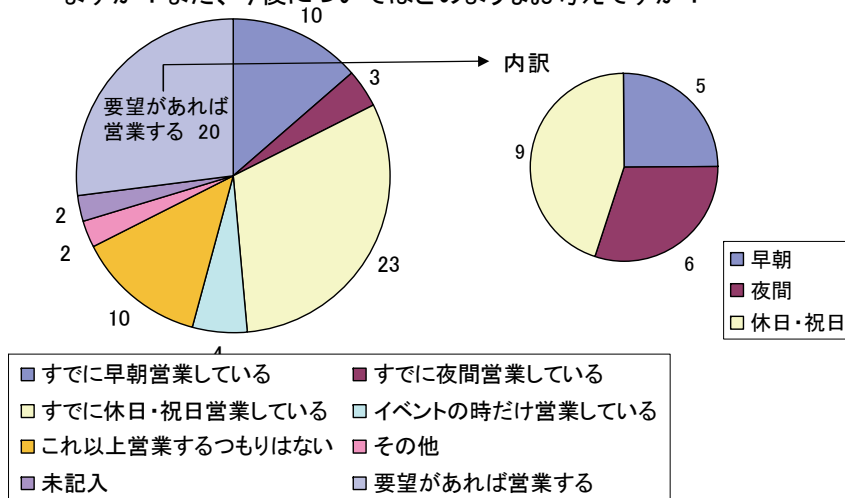
10. 雇用従業者数



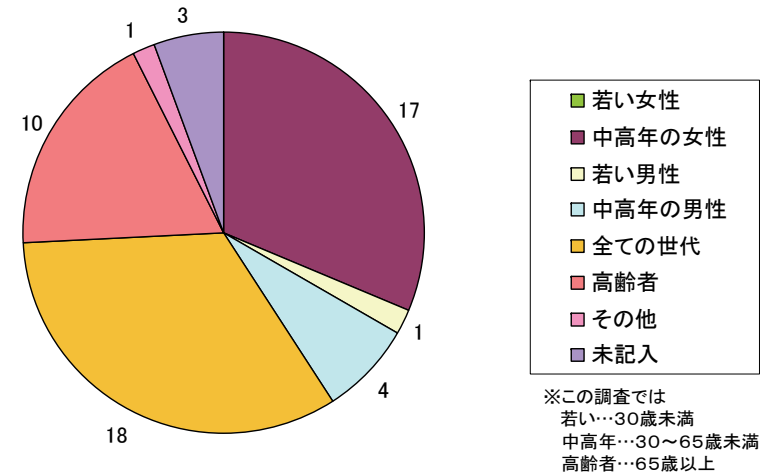
12. 休日・祝日の営業状況



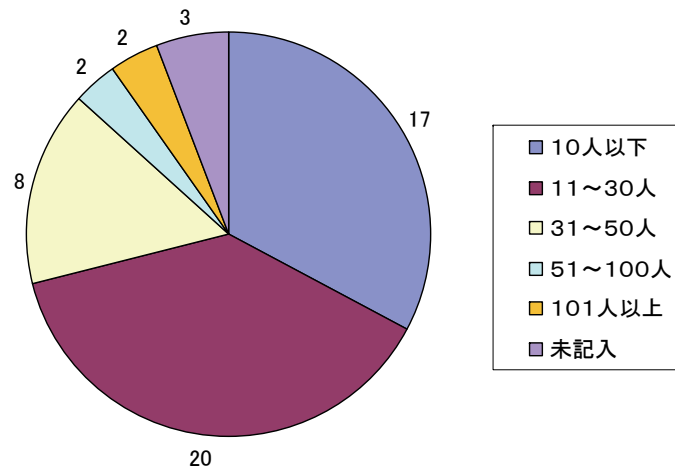
13. あなたのお店は、夜間・早朝や休日・祝日に営業しておられますか？また、今後についてはどのようなお考えですか？



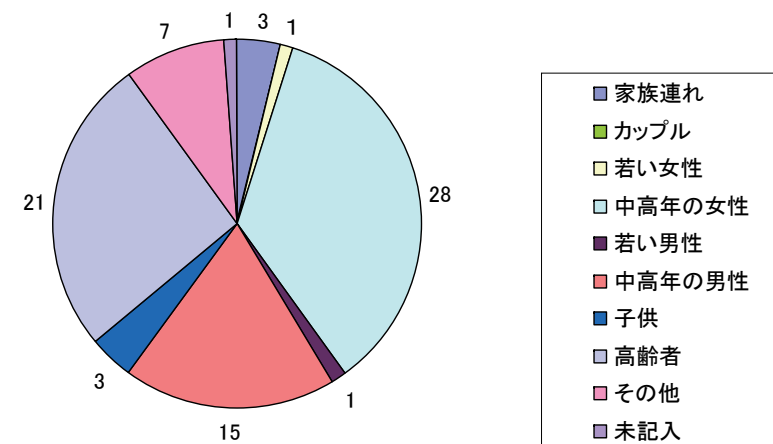
15. 主な客（年齢層）



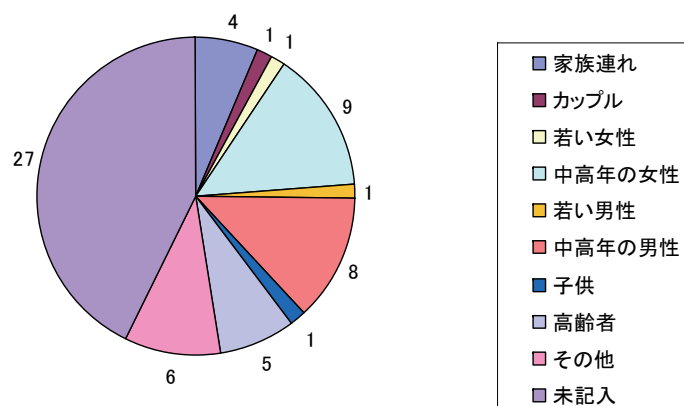
14. 一日の来客数



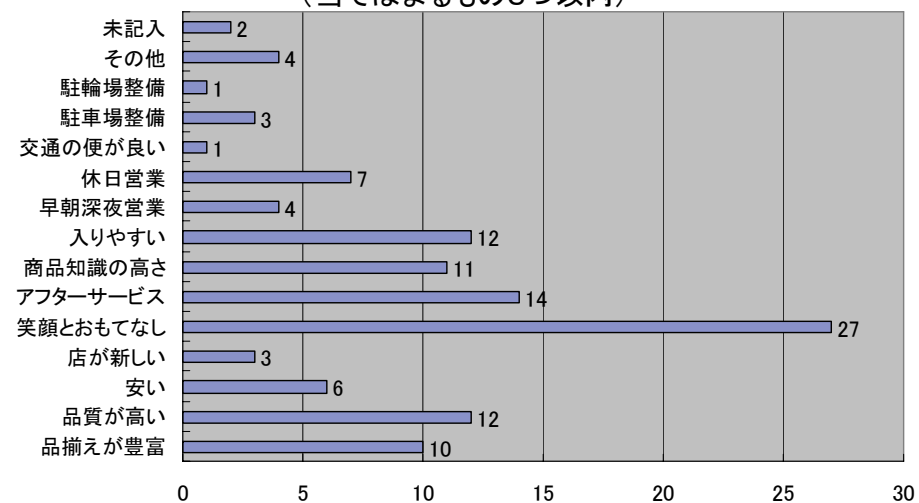
16. 平日には、あなたのお店に、主にどういう方が来られますか？（当てはまるもの2つ以内）



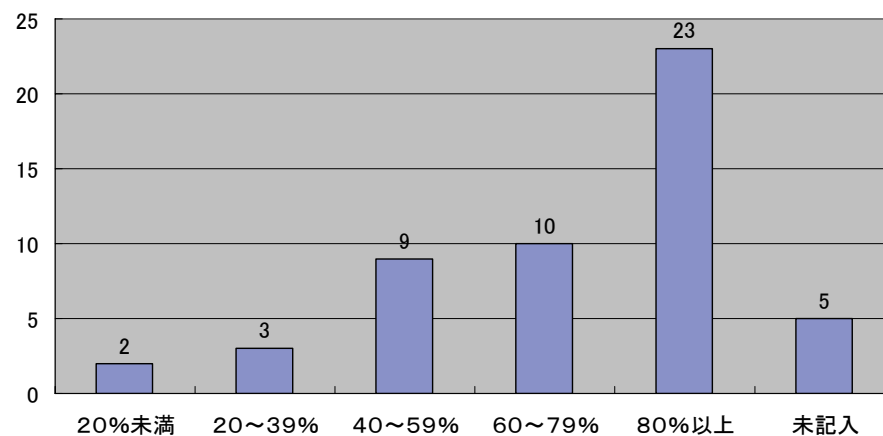
17. 休日・祝日には、あなたのお店に、主にどういう方が来られますか？



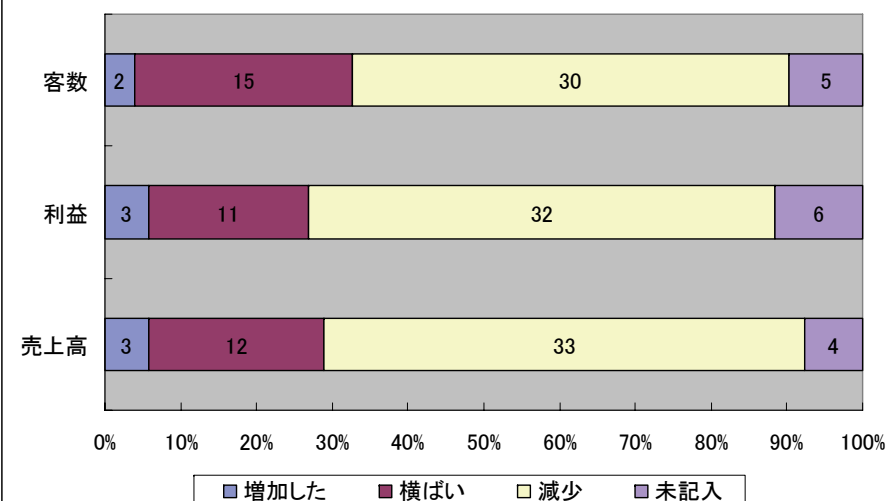
19. あなたの店の自慢にできるものは何ですか？
(当てはまるもの3つ以内)



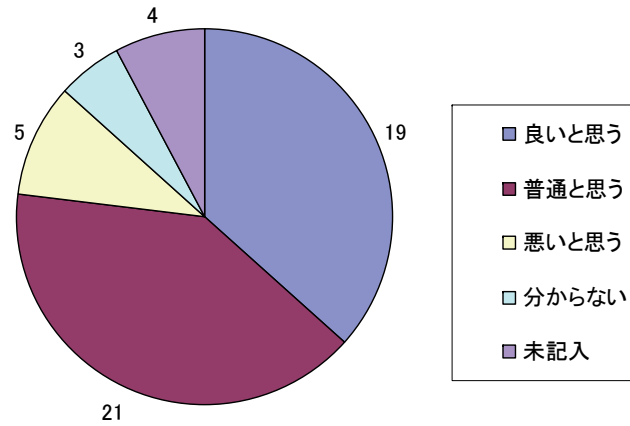
18. お客さまの中で固定客の割合



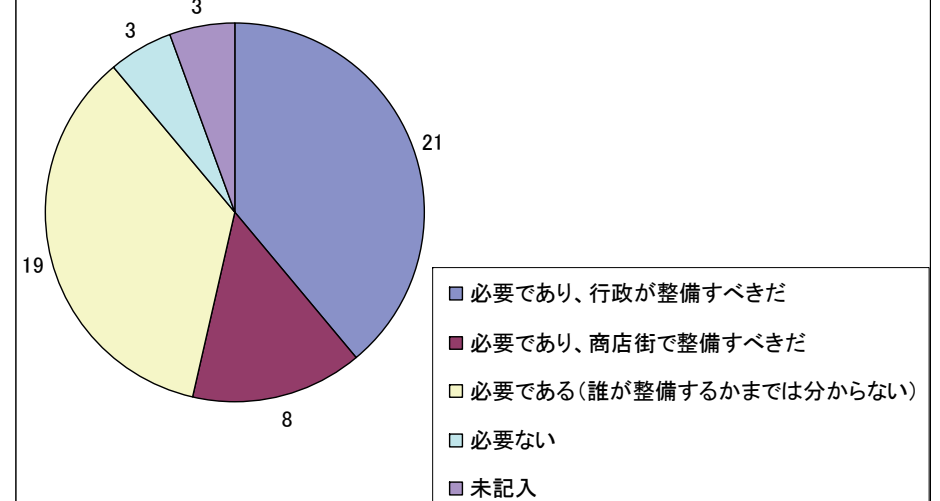
20. ここ2～3年の経営動向



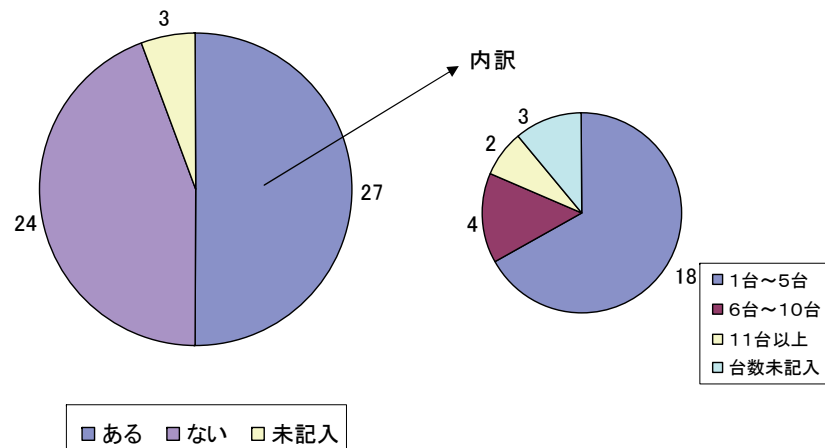
21. 立地条件は？



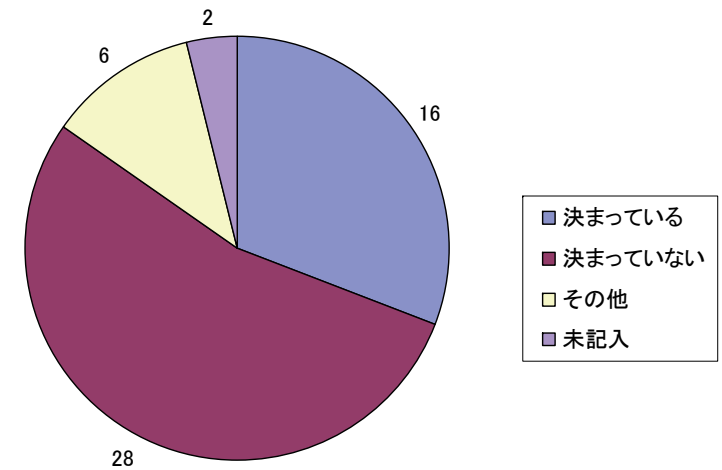
23. 商店街に駐車場は必要ですか？



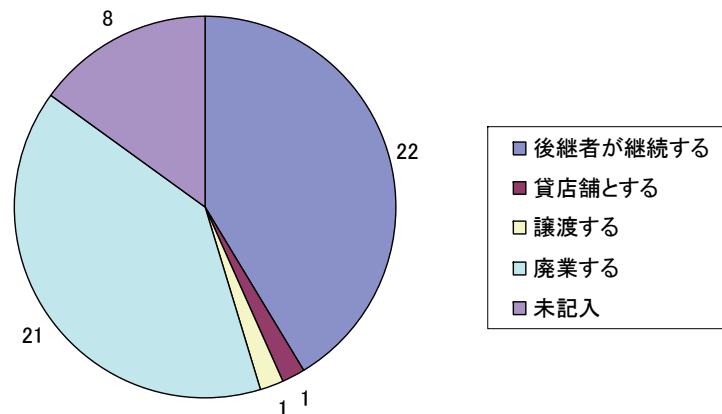
22. お客様の専用駐車場はありますか？



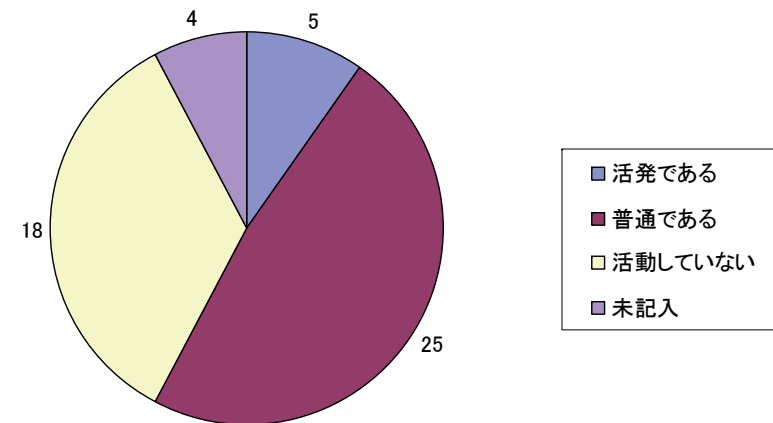
24. 後継者は決まっていますか？



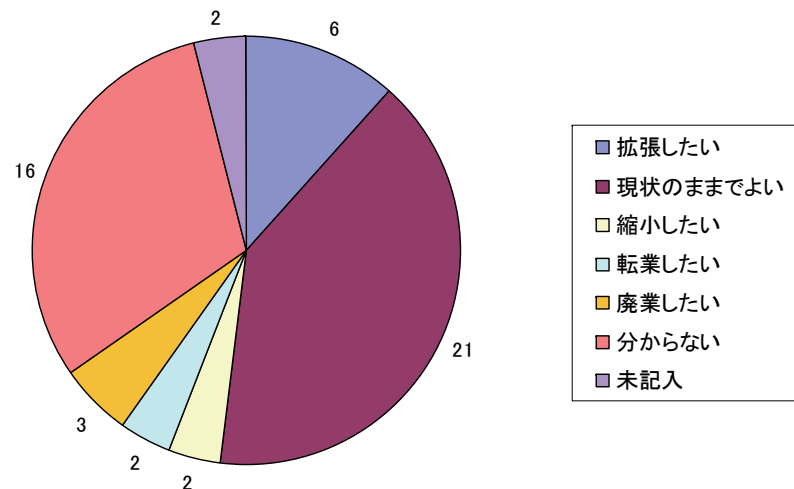
25. 突然なんらかの理由で経営者が働けなくなったらどうしますか？



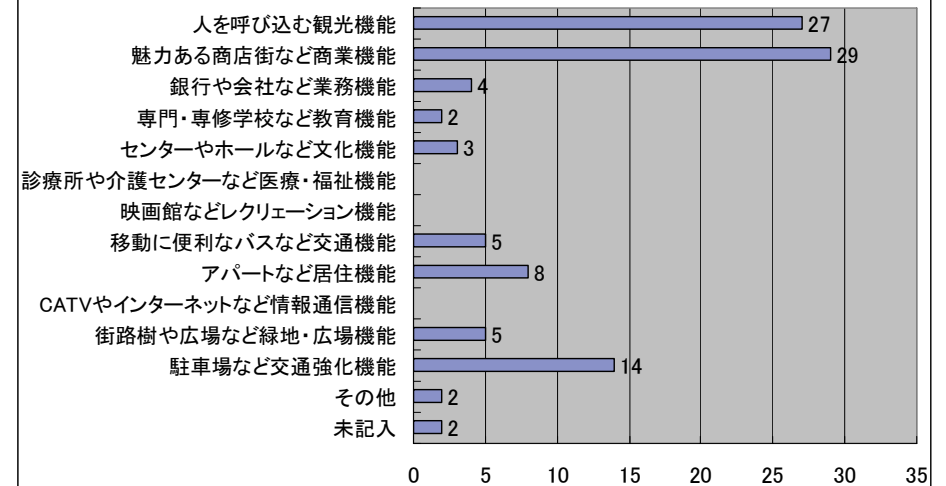
27. 商店街活動は活発ですか？



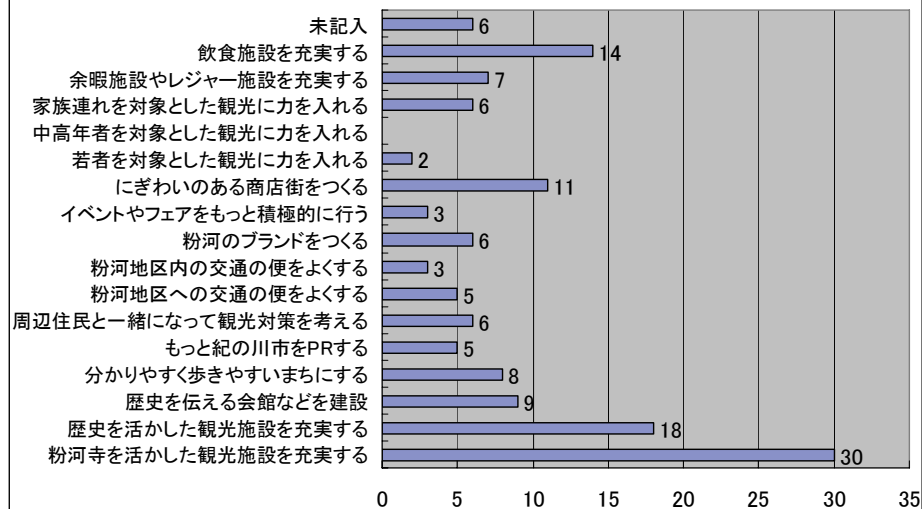
26. 5年後の経営方針は？



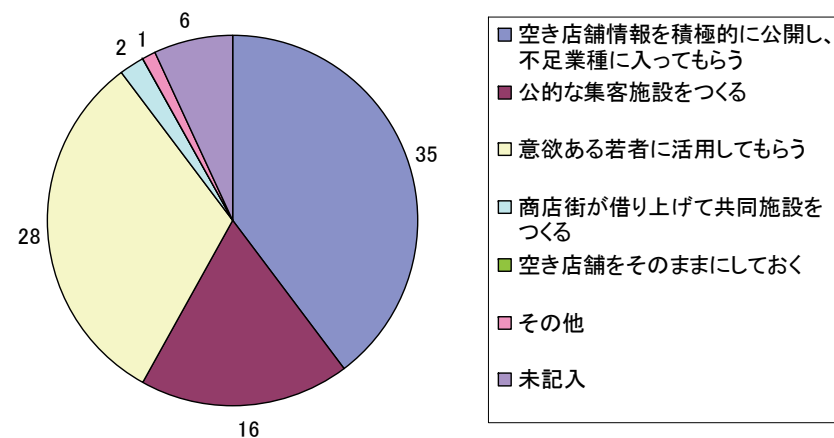
28. 粉河とんまか通り商店街の魅力を高めるために、強化すべき都市機能は何だと思いますか？（当てはまるもの2つ以内）



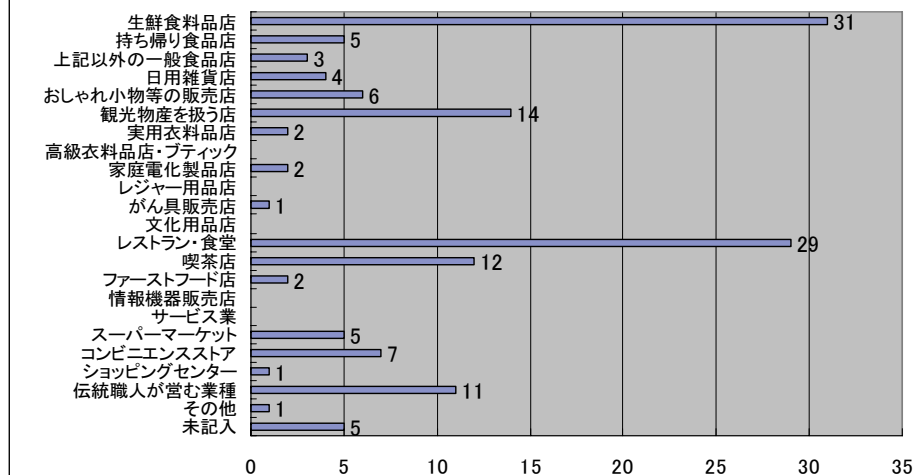
29. 粉河とんまか通り商店街に、もっと人を呼ぶための観光対策にはどのような面に力を入れたいと思いますか？（当てはまるもの3つ以内）



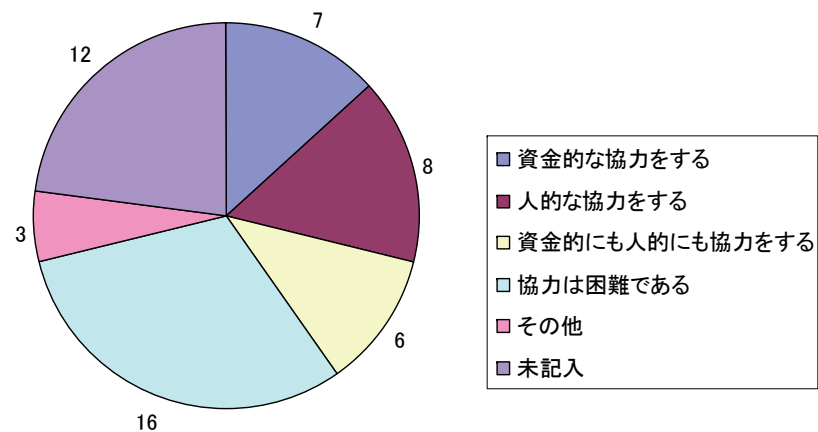
31. 粉河とんまか通り商店街の空き店舗対策として望ましいものは何だと思われますか？（当てはまるもの2つ以内）



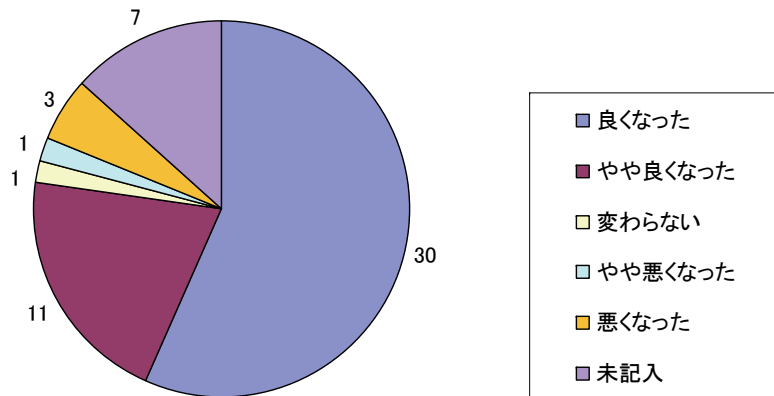
30. 粉河とんまか通り商店街に不足している業種は何だと思われますか？（当てはまるもの3つ以内）



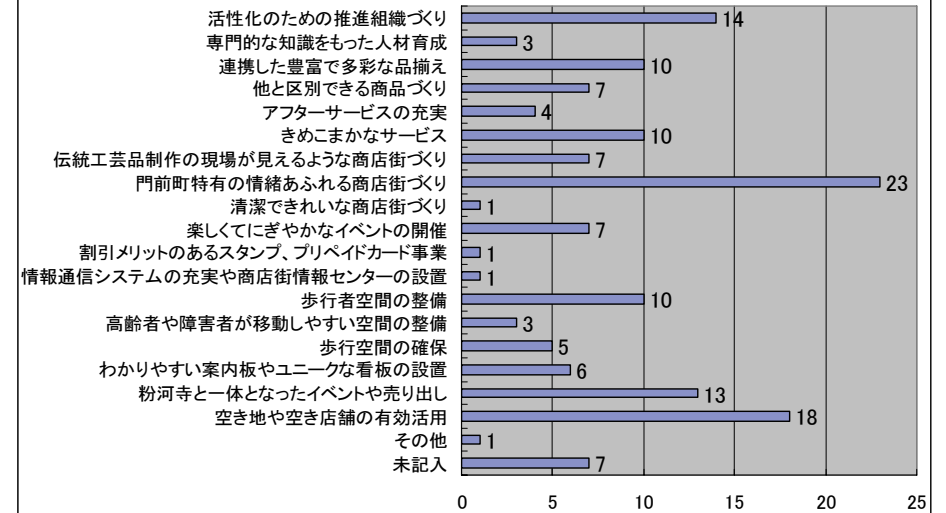
32. 空き店舗活用によどのような協力をしたいと思いますか？



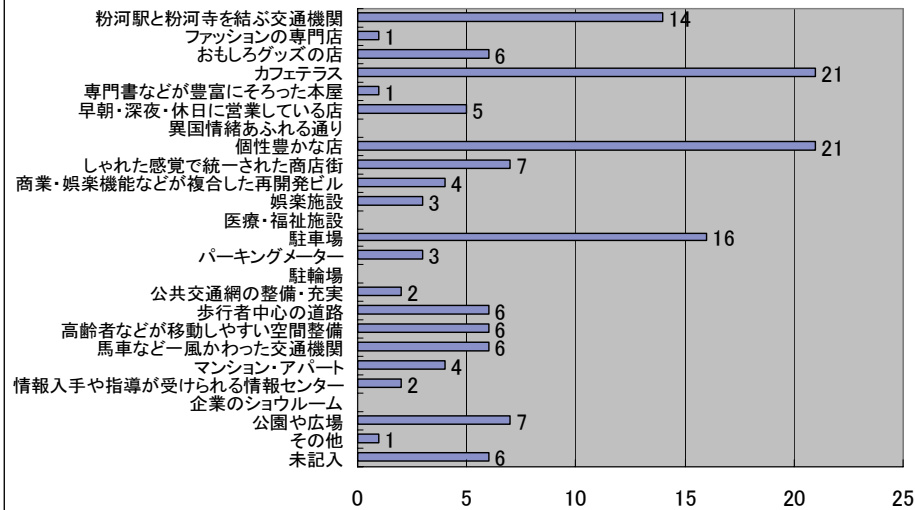
33. 道路整備をし、電柱地中化した現在と以前を比較して、粉河とんまか通り商店街に対するあなたのイメージはどう変わりましたか？



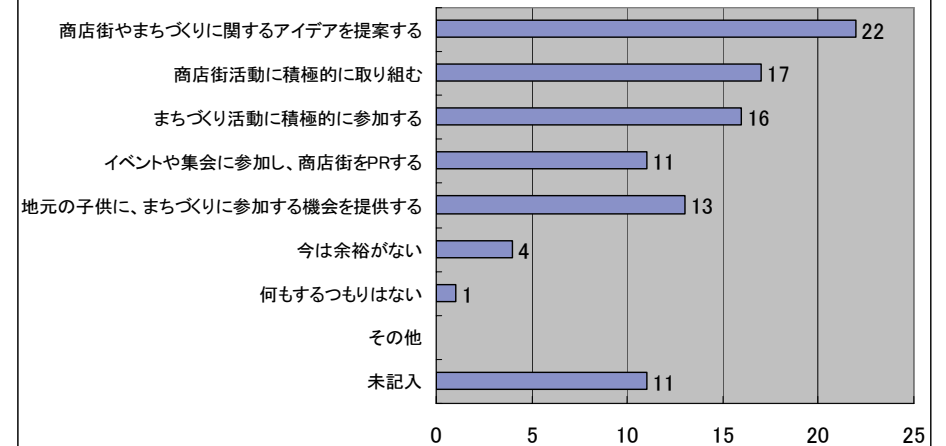
35. 粉河とんまか通り商店街に活気を取り戻すためには、No.34の施設整備以外にどのような取り組みを行うことが必要だと思いますか？（当てはまるもの4つ以内）



34. 粉河とんまか通り商店街を魅力あるものにするためには、どのような施設が必要だと思いますか？（当てはまるもの4つ以内）



36. 粉河とんまか通り商店街の活性化に向けては、商店街の方だけではなく、市民ひとりひとりの参加・協力が必要であると考えます。そこで、これまでおたずねしてきた内容を頭におきながら、あなたは何かできると考えられますか？（当てはまるもの全て）



37. 魅力ある商店街づくりとして目指すべき整備の方向性について伺います。次の各項目で示す整備の方向性について、あなたはそれをどの程度必要だとお考えになりますか。

